

# 鈴谷式土器とその年代

柳田國男の「樺太紀行」に寄せて

熊木俊朗・福田正宏・國木田大

Chronological Study of Susuya Type Pottery : In Relation to "Karafuto Kikō" by Kunio Yanagita

KUMAKI Toshiaki, FUKUDA Masahiro and KUNIKITA Dai

はじめに

- ① ソロイヨフカ(南貝塚)と鈴谷貝塚
- ② 常呂実習施設所蔵 多蘭泊出土鈴谷式土器の紹介
- ③ 鈴谷式土器の型式編年と年代
- ④ 鈴谷式土器編年に関する展望

## 【論文要旨】

柳田國男が一九〇六年の樺太紀行にて足跡を残した「ソロイヨフカ」の遺跡とは、南貝塚(別名、ソロイヨフカ遺跡)であり、この遺跡はその近隣にある鈴谷貝塚と共に、サハリンの考古学研究史上最も著名な遺跡の一つになっている。これらの遺跡の出土資料を標式として設定された「南貝塚式土器」と「鈴谷式土器」のうち、本論では後者の鈴谷式土器を対象として年代に関する再検討をおこなった。鈴谷式土器は、時代的には統繩文文化とオホーツク文化の、分布や系統の上では北海道とアムール河口域の狭間にあつて、これら両者の関係性を解明する上で重要な資料であると考えられてきたが、特にその上限年代が不明確なこともあつて年代や系統上の位置づけが定まっていなかった。本論でおこなった放射性炭素年代の測定と既存の測定年代値の再検討の結果、鈴谷式土器の年代はサハリンでは紀元前四世紀～紀元六世紀頃、北海道では紀元一世紀～紀元六世紀頃と判断された。この年代に従つて解釈すると、鈴谷式土器は

サハリンにおいて先に成立し、しばらく継続した後に北海道に影響を及ぼしたことになる。この結論を従来の型式編年案と対比させるならば、以下の点が検討課題として浮上してこよう。すなわち、サハリン北部での最近の調査成果に基づいて提唱されたカシカレバグシ文化、ピリトゥン文化、ナビリ文化といったサハリン北部の諸文化や、アムール河口域と関連の強いバリシヤヤブタ式系統の土器は、古い段階の鈴谷式土器と年代的に近接することになるため、これら北方の諸型式と鈴谷式土器の型式交渉を具体的に検討することが必要となる。また従来の型式編年案では、古い段階の鈴谷式土器は北海道にも分布すると考えられているため、その点の見直しも必要となる。鈴谷式土器を含む統繩文土器や、サハリンの古金属器時代の土器の編年研究においては、今後、これらの問題の解明が急務となる。

【キーワード】 鈴谷式土器、オホーツク文化、統繩文文化、サハリン、北海道

## はじめに

柳田國男旧蔵考古資料には樺太の「ソロイヨフカ」出土資料が含まれており、また「樺太紀行」(柳田一九六八)でも柳田がこの地を実際に訪れ、そこからスサヤ(日本名は鈴谷)川沿いに南樺太を北上したことが記録されている。「ソロイヨフカ」(Cunobekra)＝南貝塚は、その近隣にある鈴谷貝塚と共に、サハリンの考古学研究史上最も著名な遺跡の一つとあってよく、これらの遺跡出土資料を標式として伊東信雄が一九四二年に設定した「南貝塚式土器」「鈴谷式土器」(伊東一九四二)は、前者はオホーツク文化の終末期、後者はオホーツク文化の成立直前もしくは初期の土器型式として、現在、ロシア側の研究者も含めてサハリンの土器編年における主要な型式の一つとしての評価が確立されている。

本稿では、柳田の紀行に縁のあるこれらの貝塚や土器型式に関して、柳田の樺太での足跡について触れながら、特に鈴谷式土器の年代に関する問題を最近のロシアでの研究成果を踏まえつつ論じてみたい。あわせて最近、東京大学常呂実習施設に寄贈された、大正一三年に南樺太の多蘭泊で採集されたとみられる鈴谷式土器についても紹介する。

### ① ソロイヨフカ(南貝塚)と鈴谷貝塚

「樺太紀行」によると、柳田は明治三十九年九月一日と同月一九日の二回、ソロイヨフカに立ち寄った(柳田一九六八)。一九日の午後、コルサコフへの帰途、「種畜場の吉川」の案内で発掘をしたが、何も出なかった、と記されている。

明治三八年の南樺太邦領編入により、サハリン在住ロシア人の大半は大陸へ移住した。彼らは、農地・住宅・家畜を日本人に売却して立ち去っ

たが、多くの牛馬は放置された。樺太庁や農商務省の記録によると、この事態は現地で大きな社会問題となっていた(樺太庁編一九〇八、樺太庁拓殖部一九二三、農商務省農務局一九二二など)。樺太庁の前身、民政署は、南樺太四ヶ所に牛馬収容所を設置し、その対応にあたった。また翌三十九年五月、収容所を合併してソロイヨフカに種畜場を設け、牛馬育成増殖事業を開始した。柳田が訪れた種畜場とはこれであり、吉川某とは用地内の放牧地や耕作地を管理運営するかたわら、遺物採集を行っていた職員であろう。

日露戦争終結前後、国策と一体化したロシア関連の知見は、坪井正五郎や鳥居龍蔵により各地の講演会や学会誌で発表された(坪井一九〇五a・一九〇五b・一九〇五c、鳥居一九〇五など)。柳田が訪問する前月には、動物学的調査のため同年五月に渡樺した動物学者・飯島魁が持ち帰ったソロイヨフカの貝塚出土遺物を、石田収蔵が東京人類学会雑誌上で紹介している(石田一九〇六)。また、飯島と同じころ渡樺した下斗米秀二郎も、この貝塚に関する見聞を東京に持ち帰っている(下斗米一九〇六)。柳田は「樺太紀行」で、飯島が行った調査に触れている(柳田一九六八)。植民政策がいち早く進んだ地域の出来事であり、東京にソロイヨフカの貝塚の噂はもう伝わっていたのだろう。

柳田が樺太の遺跡に当時どれほど関心を持っていたのかわからないが、「樺太紀行」では「アイヌ」や「コロボツクル」に関心を寄せている(柳田一九六八)。東京人類学会にはまだ入会していなかったが、本会から発せられていた言説は見聞きしていたであろう。柳田が樺太に滞在した月、遺跡の付近で軽便鉄道敷設が着工されており、「樺太紀行」にはその様子も記されている。線路の位置はあきらかに遺跡内にかかっているため、工事による遺跡の破壊・露出を目撃していた可能性もある。樺太での用務を終えコルサコフに戻る途中、ソロイヨフカで時間をとり、遺跡を掘ってみた動機は、こうした点にあったのかもしれない。

ソロイヨフカには、貝塚という日本語地名が後に付けられた。そのことからわかるように、ソロイヨフカ村周辺と眼下にひろがるアニワ（Aniwa：日本名は垂庭、以下同）湾奥―ロソセイ（Лосодей：千歳）湾奥の海岸には、広大な貝塚遺跡が存在する。貝塚の存在は旧露領期にも知られており、石灰採取の場でもあった。明治一五年、I. S. ポリャコフ（И. С. Поляков）がススヤ（Суэя：鈴谷）川口の貝塚で墓の発掘を行っている。これが、記録に残るススヤ川口遺跡群での初めての調査である〔Козырева, 1967〕。明治二〇年代に入ると、B. O. ビルスツキー（В. О. Пилсудский）らが発掘を行っている〔Васильевский・Голубев, 1976〕。サハリン先住民たちの起源を探るため、人骨がよく残る本遺跡群は非常に注目されていた。

本遺跡群が所在するロソセイ湾奥には、ススヤ川、スレドニヤヤ（Средняя：中）川、ツナイ（Тунай：ツイ）川が注ぎ込むススヤ原野がひろがる（図1参照）。周囲は落葉樹林・針葉樹林・草原・湿原に由来する植生と豊富な海産資源に恵まれ、気候は比較的穏やかである〔樺太民政署一九〇七〕。ススヤ川の河口周辺には、貝塚や竪穴の窪みが多数残っている。サハリン島内における最大級の貝塚遺跡であり、ススヤ川口左岸比高約一・二m内外の低位段丘上に位置する鈴谷貝塚（別名、北貝塚）と、そこから約三km南のソロイヨフカ川口にある南貝塚（別名、ソロイヨフカ遺跡）とに区別される〔新潟一九七〇〕。

柳田は、「丘の上」と「湾岸の貝塚」を掘っている。新潟武彦による遺跡名にあわせると、「丘の上」とはソロイヨフカの左岸段丘上の「南貝塚遺跡」〔新潟・宇田川一九九〇参照〕、つまり現在のソロイヨフカ遺跡の範囲内であろう。一方、南貝塚遺跡の分布する段丘の千歳湾側の低位段丘面には、「南貝塚下遺跡」〔新潟・宇田川一九九二〕がある。「海岸の貝塚」

とは、この地点を指すと思われるが、調査地点に関する詳しい情報がないので、現在周知される鈴谷貝塚の範囲内ではないともいえない。ソロイヨフカは早くから入植や開発が進んだ地域である。また、遺物が多量に出土することから、遺跡の乱掘もかなり行われたという。大正一三年に清野謙次が鈴谷貝塚を発掘した際、南貝塚遺跡はすでに大きく破壊されており〔清野一九二五〕、それから約九〇年を経た今日、大規模開発からは免れた南貝塚下に包含層が残る可能性はあるが、南貝塚本体はほぼ壊滅状況にある。

日ロ両国の先行研究から、南貝塚と鈴谷貝塚はともに、オホーツク―アイヌ文化を中心とする時期に形成された一連の遺跡群であることが判明している。土器文様は両地点ともほぼ同種だが、違いもあると清野は指摘した。鈴谷貝塚からは「組み紐を押し付けて造った模様やら、禾科植物たる麦の穂様のものを押し付けた様な自然物利用の模様も稀に出る」〔清野一九二五・二三頁〕というのである。縄線文による体部文様が特徴的な鈴谷式のことである。オホーツク土器の型式分類を行った伊東信雄は、鈴谷式↓十和田式↓江の浦式↓南貝塚式・東多来加式という編年案を提示した（伊東一九四二）。縄線文が特徴となる鈴谷式は、平行的沈線文や型押文を特徴とする南貝塚式より古いという年代観は、今も肯定できる。ただし、鈴谷貝塚地点に鈴谷式期の遺物・遺構が多く分布するとはいえるが、地点ごとに時期差があるのかどうかは不明である。新潟は、南貝塚が江の浦式を主体とする遺跡であり、伊東の設定した「南貝塚式」は適切ではないとし、「白川式」とよぶことを推奨した〔新潟一九五一・一九七〇<sup>1)</sup>〕。そのため南貝塚地点は、南貝塚式期の単純層ではなく、鈴谷貝塚地点より全体的に新しい文化層がひろがっていたと考えられる。

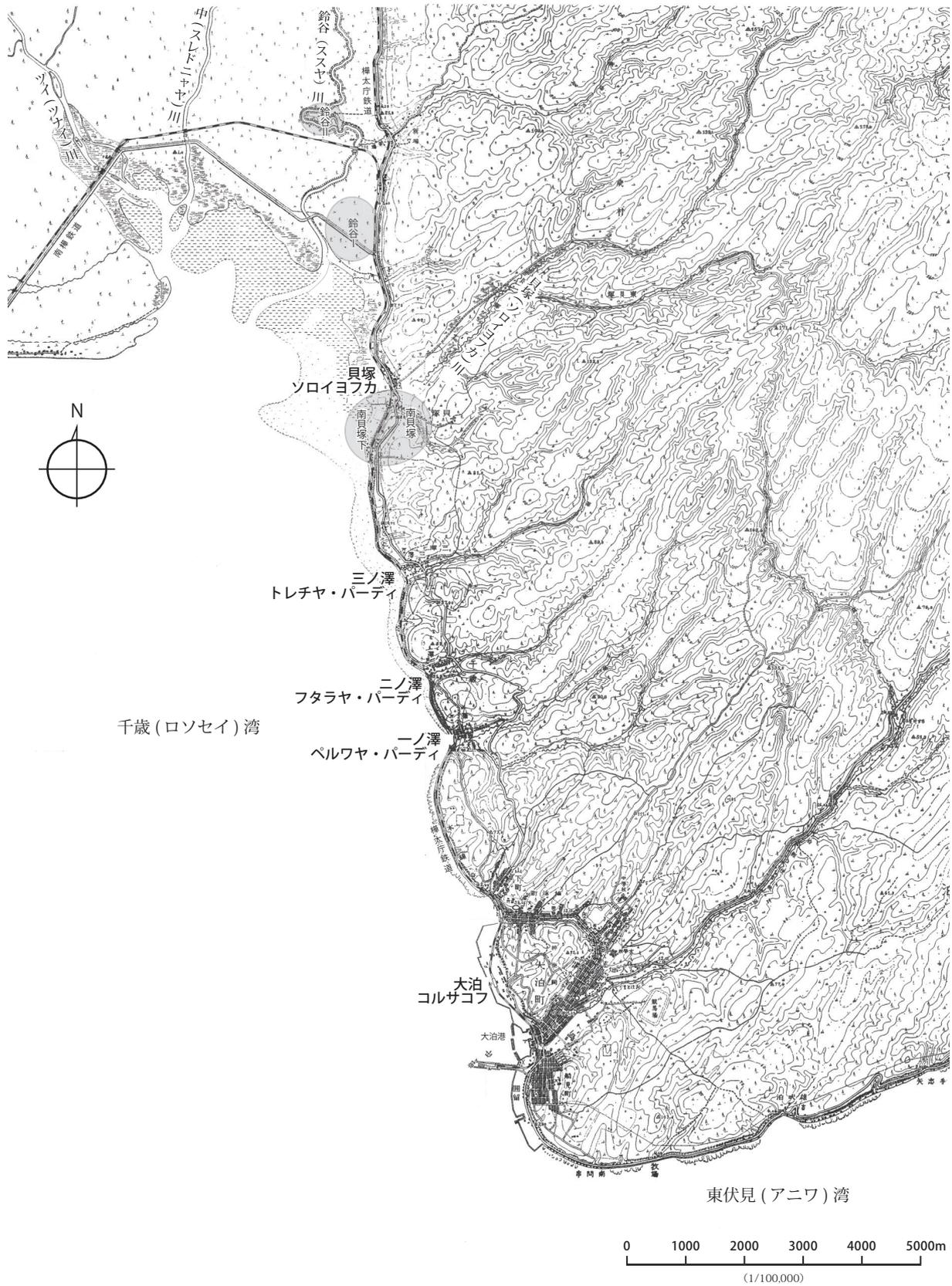


図1 鈴谷貝塚と南貝塚の位置 [遺跡の位置は、Шубин・Шубина,1977 を参照]

## ② 常呂実習施設所蔵 多蘭泊出土鈴谷式土器の紹介

### (一) 資料の由来

図2は現在、東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設に所蔵されている鈴谷式土器で、今回が初の紹介となる資料である。本稿で行った年代測定の対象に含めたことから、ここで詳細を述べておきたい。

本資料は二〇〇一年に豊原熙司氏から常呂実習施設に寄贈されたもので、資料が収められていた木箱には「発掘 大正十三年八月 場所 樺太 多蘭泊 鐵道沿線 樺太庁鐵道事務所勤務 庄司元彦」の墨書きが記されていた。本資料はこの「庄司元彦」氏から別の第三者に渡った後に豊原氏に寄贈され、さらに常呂実習施設へと寄贈されたが、木箱に書かれた「庄司元彦」氏の詳細、またこの庄司氏から第三者に資料が渡った経緯は不明である。しかし墨書きに記された出土地の情報については、以下の二点からみて資料との間に矛盾はないといえる。第一は土器そのものの特徴で、後述するようにこの鈴谷式土器はサハリン出土のそれに見られる型式学的特徴をそなえている。第二は「多蘭泊」の遺跡に関する情報である。多蘭泊はロシア連邦サハリン州ホルムスク都市管区プラウダ(Прява: 広地) 村カリリーナ(Калинино) の旧邦領名であり、サハリン南部の西海岸、カリンカ(Калинка) 川の河口部に位置している。多蘭泊もしくはその周辺の遺跡や出土遺物については戦前から報告があり〔大坊一九二六、河野一九三三〔Tohyo, 1973〕、東北大学考古学研究室編一九八二、新岡・宇田川一九九〇、新岡・宇田川一九九二〔Gorbunov and Amano, 2002〕〕、鈴谷式土器やオホーツク土器の出土が知られている。特に鈴谷式土器については完形土器が複数個体報告されており、ある程度の

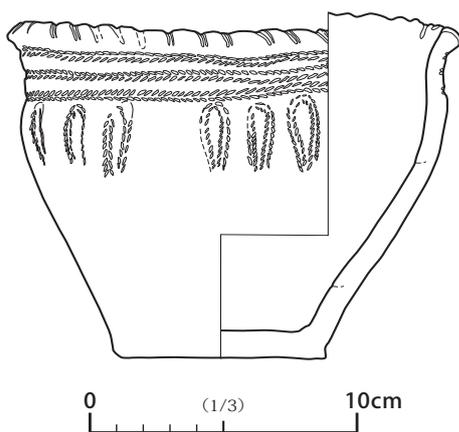


図2 常呂実習施設所蔵 鈴谷式土器〔多蘭泊出土〕

規模の遺跡が存在したと考えられることから、この資料が多蘭泊の周辺で出土していたとしても矛盾はない。なお、「鐵道沿線」という記述に関しては、河野の報告した遺跡(河野前掲)とカリーニナ二遺跡(GorJunov and Amano 前掲)が村の南部にある小川の南岸の鉄道線路沿いに位置するとされており、両者共に鈴谷式土器が出土していることからすると、全くの想像ではあるが、本資料もこれらの遺跡ないしはその周辺から出土した可能性を考えてよいかもしれない。

以上の点から本資料については、确实とはいえないものの、木箱の墨書きに記録された状況で発見されたものと考えておきたい。大正一三(一九二四)年の発掘資料であるならば、カリーニナ周辺の出土資料のうち、の収集年代が判明しているものなかでは、最も初期に発見された資料といえるであろう。

## (二) 資料の型式学的特徴

土器の型式学的な特徴は以下のとおりである。小型の深鉢形土器で大きさは口径一七cm、頸部径一五・七cm、胴部径一五・九cm、器高一四cmである。全体の一／四程度が割れているが欠損部分はなく、完形の土器である。灰褐色を呈しており、外面の上半部と底部付近、内面の口縁部付近には炭化物が付着して黒ずんでいる。胎土は砂を含み、焼成はやや悪い。器面調整は内面・外面ともに横方向のナデ調整である。地文となる縄文は施されていない。

器形は頸部がわずかにくびれており、口唇部付近がやや肥厚して外側に突き出ている。口唇部には縄の側面圧痕が二本一単位で斜め方向に施されているが、炭化物が付着しているため縄の原体は判然としない。頸部には縄の側面圧痕が二本一単位で三単位めぐっている。縄の原体はLとRの組み合わせである。胴部には二本一単位の縄の側面圧痕で描かれる馬蹄形のモチーフが、三個一組で合計六組施文されている。縄の原体

はやはりLとRの組み合わせで、口縁部文様と同じ原体である可能性が高い。

本資料を後述する熊木の分類(熊木二〇〇四)にあてはめると、「タイプA1」に相当する。このタイプの中でも、地文に縄文がみられない点はサハリンの資料に特徴的なあり方を示していると評価できる。

## ③ 鈴谷式土器の型式編年と年代

### (一) 編年研究の現状

前節までに述べたとおり、鈴谷式土器は伊東信雄によって設定された土器型式であり、伊東は樺太先史時代土器編年のなかで、この土器型式を、地文に縄文をもち口縁部には突瘤文や撚糸の圧痕文を有する遠淵式土器より新しく、オホーツク土器である十和田式土器より古い位置においた。その後の研究において鈴谷式土器は、時代的には縄文文化とオホーツク文化の、そして分布や系統の上では北海道とアムール河口域の狭間にあつて、これら両者の関係性を解明する上で重要な位置を占めていると考えられてきたが、統縄文土器との編年対比や、サハリン中部以北の土器との系統関係、さらにオホーツク文化の成立過程上での位置づけについて、未だに不明瞭な点が多いのが現状である。ここではまず、鈴谷式土器の型式編年研究の現状や、最近、サハリン北部やアムール河口域において研究が進展しつつある文化編年の成果について再確認する。その上で、鈴谷式期の資料に対してあらたに放射性炭素年代測定を行い、年代を再検討する。鈴谷式をめぐる議論が混沌としている最大の理由は、その年代上の位置づけがはっきりしない点にあるのだが、そのような現状に対して新たな展望を開くことが目的である。

まずは鈴谷式土器に関する型式編年研究の現状について簡単にま

表1 鈴谷式土器編年表 [熊木 2004]より

時期区分	土器のタイプ	器形	北海道	サハリン		
				南部西海岸 ～アニワ湾岸	南部・中部の 東海岸	中部西海岸
I期	A1(・B?)	南部では平底	役場I類(3-2) 香深井B 役場II類(3-1)	鈴谷(3-3)		※1
II期	A2・B	丸底	オンコロマナイ (3-5)	鈴谷	テルベニエI スタロドゥフスコエII 2号 (3-4)	ウスチアインスコエ堅 穴 (3-6~8)
III期 前半	C1	丸底 主体	常呂川河口 ピラガ丘(3-14)	アジョールスクI 2層 (3-11~13) 蘭泊・多蘭泊	+	+
III期 後半	C2			鈴谷(3-15・16)	スタロドゥフスコエII 1号	

括弧内の数字は本文掲載の図の該当番号。+ は断片的に資料が確認されていることを示す。  
遺跡名の日本語表記は本文と統一した。

※1 タイプB とほぼ同じ土器群が、丸底・櫛目文主体で分布することが予想される。恵須取川口第3号遺跡資料の大半はこの段階に当てはまる可能性が高い。

表2 北海道東部・北部 続縄文土器編年表 [熊木 2003]より

時期区分※1		道東部網走	道東部釧路	道北端部
前半	早期	(栄浦第二・第一)	(フシココタン下層)	(メクマ)
		元町2式	興津式	(種屯内I c・I d)
	前期	宇津内II a I式 宇津内II a II式	下田ノ沢I式	(声間川大曲III B)
後半	中期	宇津内II b I式	下田ノ沢II 1式	※2
		宇津内II b II式	後北C1式※3	鈴谷式
	後期	後北C2・D式 [I期] ※4 後北C2・D式 [II期] 後北C2・D式 [III期]		
	晩期	北大I (ノトロ岬)		十和田式 (オホーツク土器)

※1 時期区分は、宇田川洋氏の5期区分[宇田川 1982]をもとに、早期を一部改変して設定した。

※2 宇津内II b式や後北A式等が断片的に確認されている。

※3 南千島では下田ノ沢II 2式が確認されている。

※4 後北C2・D式のI期～III期の細別は熊木[2001]による

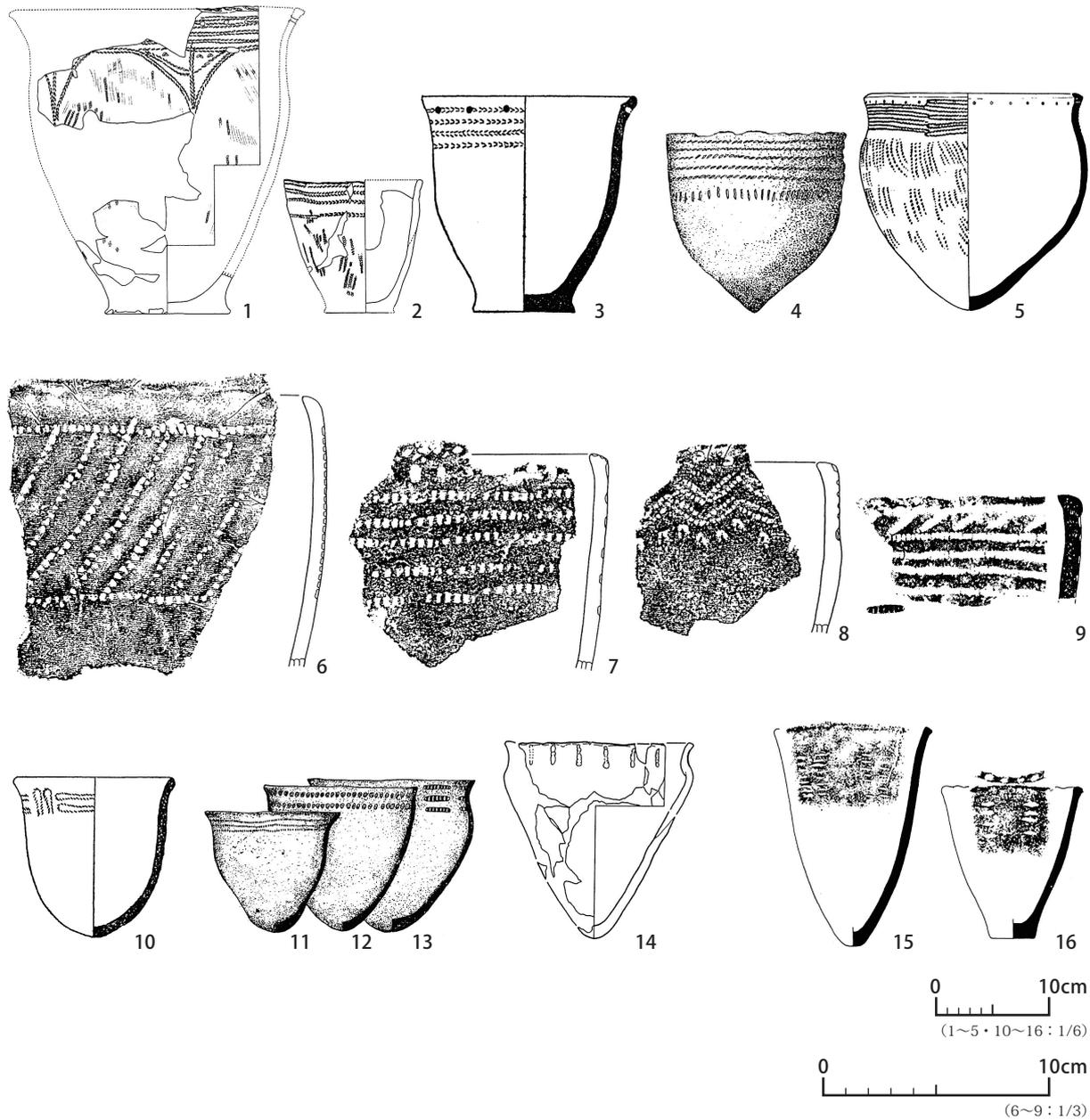


図3 鈴谷式土器の型式分類〔熊本2004より抜粋〕

1~3: タイプA1, 4・5: タイプA2, 6~9: タイプB, 10~14: タイプC1, 15・16: タイプC2  
 (1・2: 利尻富士町役場遺跡, 3・10・15・16: 鈴谷貝塚, 4: スタロドゥフスコエⅡ遺跡, 5: オンコロマナイ遺跡,  
 6~8: ウスチアインスコエ遺跡, 9: 恵須取川口第3号遺跡, 11~13: アジョールスクⅠ遺跡, 14: ピラガ丘遺跡第Ⅱ地点)

とめておこう。伊東が鈴谷式として設定した土器型式には、文様としては「撚糸文(縄目文)<sup>3)</sup>」と「櫛目文」器形には「尖底丸底」と「平底」の、それぞれ両方が含まれていた。このように器形・文様上様々なバリエーションを有する鈴谷式土器については、その系統や型式編年をめぐって議論がなされてきたが、それについて熊木は以前、先行研究の論点をまとめた上で型式編年に関して自説を述べたことがある(熊木一九九六・二〇〇三・二〇〇四)。その時点での結論は表1・表2のとおりで、要点は以下のようなものであった。

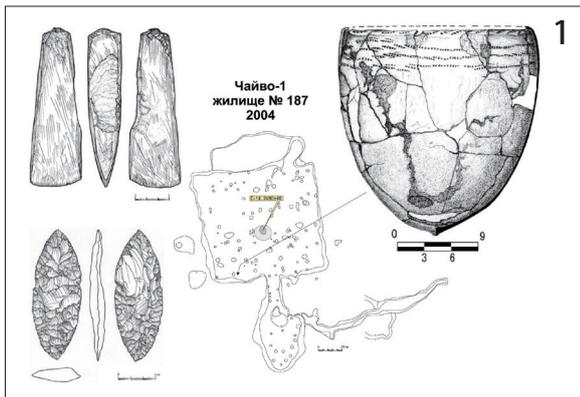
- ① 鈴谷式土器は「タイプA」「タイプB」「タイプC」の三種に大別できる(図3)。タイプAは二本一組の縄線文を主な文様要素とし、縄線文を水平に複数段めぐらせる幅の広い文様帯を特徴とする。タイプBは櫛目文を主な文様要素とし、文様帯と文様構成はタイプAに似る。タイプCは文様帯の幅が狭くなるなど、文様構成が単純なものである。
- ② タイプAは平底のA1と丸底のA2に、タイプCはタイプAやBに近いC1と縦長の器形で文様モチーフを縦に重ねるC2に細別される。各タイプの時間的な前後関係は表1のとおりである。
- ③ 縄文土器との編年対比に関しては、確実な層位的関係や型式交渉の事例を認めるのが難しいことから、「鈴谷式タイプAは、後北C<sub>2</sub>・D式前後と併行する可能性がある」という認識に止まらざるを得ない。すなわち、表2に示した鈴谷式の編年的な位置も確定的とはいえない。

熊木の編年案は資料的な限界もあつて決定的なものとはならず、その後も鈴谷式土器をめぐる議論は継続されてきた。なかでも最近注目を集めているのは、サハリン北部での発掘調査成果に基づいて提唱された、ナビリ文化(図4-1-1)およびピリトゥン文化(図4-1-2)〔ワシレフスキーほか二〇〇九〕との関係である。この二つの文化の土器は、丸底もしくは

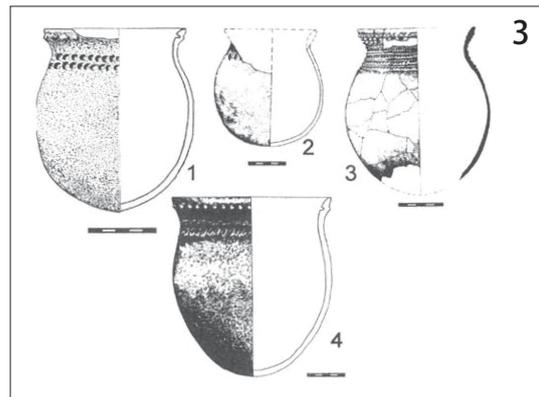
尖底の器形で口縁部に櫛目文や刻文などを有しており、鈴谷式土器のうちの特にタイプCに近く、両者の間には何らかの関連が想定される。その一方で、遺構(炉址)出土炭化物の放射性炭素年代測定ではナビリ文化が2490±40BP、ピリトゥン文化が2190±35BPの結果が示されており、熊木などによる型式編年から想定されてきた鈴谷式の年代(紀元三〜四世紀前後)との間には少し開きがある。型式学的解釈と年代観が矛盾するような状況をはじめとして、ナビリ文化およびピリトゥン文化と鈴谷式との関係に関しては、議論がまだ深まっていないのが現状である。加えて最近、サハリンでも報告例が増えてきた「サーパトナヤ10タイプ」(Dudoplyr, 1998、木山ほか二〇〇三)ないし「バリシャヤブフタ式」(Deryugin, 1994、Il'inskiy, 2002、木山ほか二〇〇三)土器(図4-1-3)についても、年代がおおよそではあるがこれらの時期に近いことが明らかになってきており(福田ほか二〇〇七)、アムール河口域からサハリン、北海道北部に至る地域に併存したとみられるこれら複数の土器系統をめぐる解釈はより一層難しくなっている(木山二〇〇五、福田二〇一〇、木山二〇一二、菊地二〇一二、熊木二〇一三、福田二〇一四)。さらに以前から議論がなされてきた、オホーツク土器である十和田式土器と鈴谷式土器との系統関係や年代についても、研究者間に合意が形成されたとは言いがたい状況が続いている(榎田・熊木・福田二〇〇七、小野・天野二〇〇八)。

## (二) サハリン北部の古金属器時代土器とバリシャヤブフタ式土器

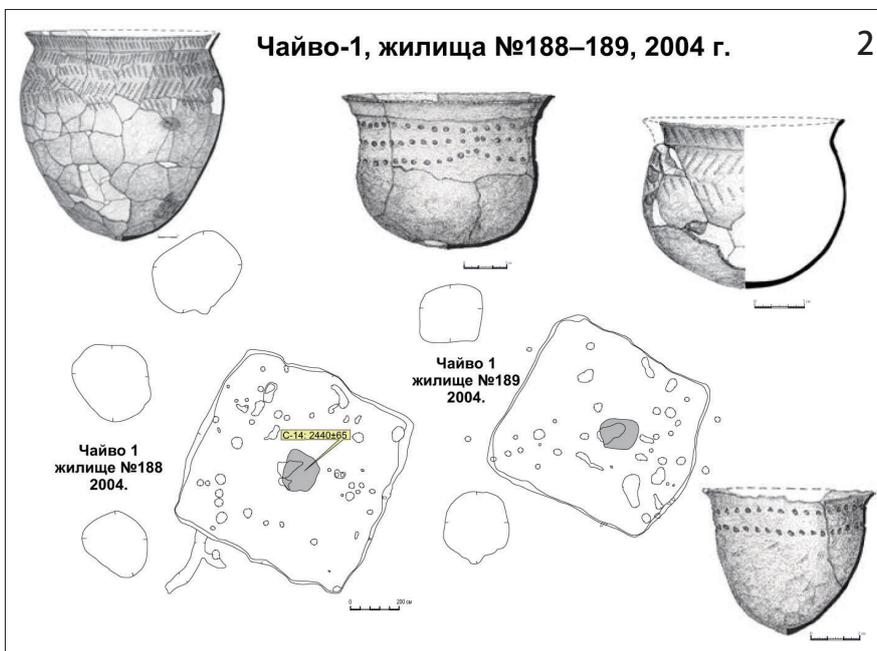
鈴谷式には縄線文と櫛目文という二種類の文様要素があるが、両者はよく似た文様帯構成をとる。鈴谷式の成立過程を考察した新潟武彦は、南部に多い縄線文土器と、北部に多い櫛目文土器とが融合して鈴谷式になると考えた(新潟一九五二)。サハリン南北間で二系統が接触・融合することで鈴谷式が成立するという変遷案は、今日まで多くの支持を得て



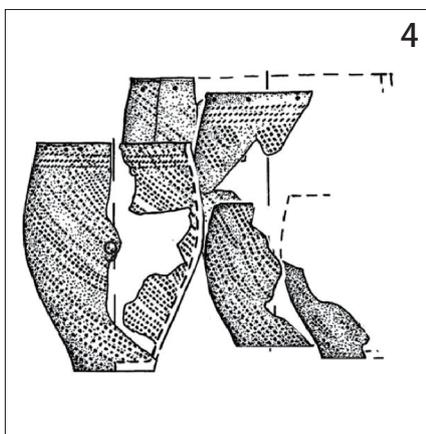
ナブリ文化の住居と遺物 (チャイボ1遺跡)



バリシャヤプタ式の土器 (Федорчук,1998 より)  
(1:ザパトノエ10, 2・4:ベルジャンスキエ2, 3:ドンスコエ3)



ピリトゥン文化の住居と土器 (チャイボ1遺跡)



アニワ文化の土器 (ユージナヤ2遺跡)



カシカレバグシ文化の遺物 (カシカレバグシ5遺跡)

図4 サハリンにおける新石器時代～古金属器時代の諸文化

(1～4: Василевский・Грищенко,2012 より, 5:グリシェンコ 2015)

いる。この案が正しいとすると、鈴谷式の前段階の北部には櫛目文の土器系統が存在したことになる。この櫛目文系の一群を伴う文化複合体は、これまで北サハリン文化とよばれてきた。

北サハリン文化という文化名称は、サハリン北部における遺跡調査がごく一部に限られていた一九九〇年代まで、現地の研究者間で用いられてきた。サハリン北部では、アムール下流域新石器時代後期によくみられる土器文様と類似した櫛歯ジグザグ文をもつ、イムチン遺跡群出土のグループ [Bacurievskii・Turyob, 1976]、そして、櫛目文・突瘤文などをもつ、北東海岸からツイミ川流域、北西海岸の遺跡で出土するグループが、紀元前四千年紀以降に存在することが指摘されてきた [Шлыгина・Жуликовская, 1986]。文様や製作技術がはなれた、これら二つのグループを伴うのが、「イムチン新石器文化」と「北サハリン文化」であるとされてきた。これは、わずかな土器資料のなかに周辺地域との並行関係をみいだし、さらに包含層や遺構から得られた<sup>14</sup>C年代の分布傾向を合理的に解釈しようとした結果である。時期や地域が厳密にかぎられた單元ではないため、アムール下流域やサハリン南部で細かく設定されてきた考古学的文化群との関係を捉えることが、非常に難しかった。しかし一九九〇年代後半から状況は一変した。油ガス田開発に係る緊急発掘調査がサハリン北東海岸で急速に進み、サハリン北部における遺跡情報の精度は高まった。そのなかで、北サハリン文化とおなじく櫛目文系土器が伴うナビリ文化と、それとは異なる文様の土器が伴うピリトゥン文化が設定されてきた [ワシレフスキーほか二〇〇九など]。紀元前一千年紀半ばから後半、古金属器時代に属するサハリン北部に特有の文化群であることがわかってきた。

最近の知見に基づくと、サハリンには、新石器／古金属器時代移行期（新石器時代晩期）に南部のアニワ文化（図4・4）と北部のカシカレバグシ文化（図4・5）があり、古金属器時代に北部のナビリ文化とピリ

トゥン文化、南部の鈴谷文化がある。各々の存続期間については、調査の進捗に応じて頻繁に更新されており、上限と下限の年代はとくに限定しにくい状況にある。本論執筆時（二〇一五年四月現在）の年代観は、二〇一二年にA. A. ワシレフスキー (A. A. Bacurievskii) とV. A. グリシェンコ (V. A. Gripenko) が発表している [Bacurievskii・Gripenko, 2012]。これによると、暦年で、アニワ文化は前八〜三世紀、鈴谷文化は前五〜後五世紀、ピリトゥン文化は前五〜一世紀となる。アニワ文化と鈴谷文化の年代観は、二〇一五年間ほど、その理解に変化がない。ナビリ文化に関しては、年代幅を示せるほどの資料状況になく、鈴谷文化にほぼ並行すると指摘される程度である [Bacurievskii・Gripenko, 2012]。アニワ文化との関連性が指摘されるカシカレバグシ文化に関しては、紀元前一千年初頭から半ばになる見通しがある [グリシェンコ二〇一五]。

サハリンでは他に、突瘤文+丸底+櫛歯文（櫛目文）が特徴的な土器がある。これはサハリン北部に隣接するアムール河口域におけるバリシャヤブフタ式と同系統にあると指摘されている [Шелеков, 2002; Bacurievskii・Gripenko, 2012 など]。突瘤文や丸底はピリトゥン式に伴う要素であるが、バリシャヤブフタ式は、貼付粘土帯や内面から外面に向かって突く突瘤文列による口縁部直下の錨状突帯と、叩きと入念なナデツケによる薄い器壁が特徴となる。そのため、両者の違いは明白である。ただしピリトゥン式の型式内容は、部分的であるにせよ、バリシャヤブフタ式の影響を確実に受けている。

丸底が東シベリア先史土器に通底する器形であるため、バリシャヤブフタ式は、シベリアとの関係性が、もとより窺われていた。ヤクーチヤの青銅器時代の土器に関しては、一九八〇年代までの調査研究を網羅したV. I. エルテュコフ (B. И. Эртыков) による有名な研究がある [Эртыков, 1990]。それをみても、成形方法、器形、文様構成がバリシャヤブフタ式と類似した土器群がある。近年、この一群が出土する遺跡は、当地

域の青銅器文化として有名なウスチ・ミリ文化とは異なるウラハン・セゲレンニャフスカヤ文化に含まれるとされ、アムール下流域におけるバリシヤブフタ式の展開とも関係すると指摘された〔Dyakonov 2012〕。そのため、東シベリアからの南下現象に伴い、アムール河口域にバリシヤブフタ式が展開し、さらにその拡大現象がサハリンにも及んだといえる見込みがある。<sup>(4)</sup>

アムール河口域のウデイリ湖畔遺跡群に、バリシヤブフタ式に関連する<sup>14</sup>C年代値が複数ある。バリシヤブフタ1遺跡〔Hlebakov et al. 2002〕やゴールイムイス6遺跡〔大澤ほか二〇一三〕でこの型式の土器を伴う堅穴住居が調査されているが、出土木炭の年代報告はない。ただしゴールイムイス1遺跡では、バリシヤブフタ式土器のみの5層ではないものの、直下の砂利層から出土した木炭の年代は2405 ± 40BP (SOAN-5469)である〔福田・シェフコムード編二〇一五〕。ゴールイムイス5遺跡では、この型式を伴うII・4層の上部、II・1層から出土した木炭は1965 ± 100BP (SOAN-4194) である〔Hlebakov et al. 2003〕。したがって、バリシヤブフタ式の存続年代は、長く見積もって約2405 ~ 1965BPに収まる。ただし、ゴールイムイス5遺跡のII・4層とII・1層との間では、土器の型式内容に大きな差があるので〔福田二〇一七〕、2000BP前後まで下る可能性は低い。付着炭化物の年代も、数点測定されている。ゴールイムイス1遺跡では、2500 ± 30 (IAAA-61418) ~ 2470 ± 30 (IAAA-61419) であり〔坂本二〇一七〕、カリチョーム3遺跡では、2469 ± 41BP (NUTA-27568) / 2517 ± 28BP (NUTA-27563) / NUTA-27567) である〔小田ほか二〇一五〕。全体的に約2500 ~ 2400BP程度に集中する。しかし、付着炭化物には各種リザーバー効果の影響がある可能性があるため、信頼性の高い約2405BPを上限年代とみておきたい。福田がバリシヤブフタ式の直前にひろがったと考えるサルゴリ式が約2500 ~ 2400BPであることから〔福田二〇一七〕、バリシヤブフタ式は約2400BPから遅くと

も2000BPの間であるといえる。

バリシヤブフタ式もしくはそれと近い文様を有する型式は、サハリン南部の遺跡でも出土するが〔木山ほか二〇一三〕、北部から中部で比較的よく発見されており、南部は単発的な出土にかぎられる。年代が並行する土器型式群との確実な共伴事例はないが、ウスチアインスコエ遺跡でそれについて間接的に考えられる事例が報告されている〔山浦二〇一三〕。発掘された堅穴住居の屋内炉出土木炭の年代は、2500 ± 110BP (Beta-110665) である〔ワシレフスキー二〇一三〕。住居からは鈴谷式土器が多量に出土しているが、バリシヤブフタ式もしくはその系統にある土器片も一緒に出土している。これまで述べてきたアムール河口域におけるバリシヤブフタ式の年代と比較すると、この土器片は他時期の混入ではなく、住居址に伴う可能性が高い。そして、ともに出土した鈴谷式土器と並存する可能性が高い。アムールでの状況よりやや古いので、今後の検討を要する。

### (三) 放射性炭素年代測定

本項では、鈴谷式土器の年代について議論したい。鈴谷式の編年に関しては、表2のように声問川大曲Ⅲ群B類等から数型式分の時間間隔を置く〔間隙説〕〔熊木二〇一四〕と、声問川大曲Ⅲ群B類等と鈴谷式が直接連続すると考える「連続説」〔小野・天野二〇一三〕とに大きく見解が分かれる。小野・天野〔二〇一三〕では、宇津内IIb式に併行する段階にスタロドゥフスコエⅢ段階を設定し、熊木編年の空白時期を埋めている。日本側研究者は、鈴谷式に対して、大部分が後北C<sub>1</sub>およびC<sub>2</sub> D式に並行し、下限は十和田式期に連続していくという共通認識を持っている。問題となっているのは、上限の年代が遡るか否かである。

この問題に対して、今回筆者らは、既知年代値の集成と常呂川河口遺跡および尻富士町役場遺跡の分析を実施し、検討を試みた。本来であれ

ば、鈴谷式の遺構に伴う木炭試料の検討が最優先であるが、今のところ日本では鈴谷式と明確に判断できる年代試料はない。また、筆者が確認した範囲では、鈴谷式の遺構に伴う炭化物が保管されている遺跡もほとんどないようである。そのため本論では、海洋リザーバー効果の評価が難しい土器付着炭化物のデータも多く取り扱い検討を行っている。年代値の評価は、コンテキストの明確な木炭試料が望ましいことは言うまでもない。ただし、土器付着物は、直接的に土器型式と議論ができる点や、食性復元の観点から重要な試料と言える。炭素・窒素同位体比やC/N比を加味すれば、海洋リザーバー効果の評価も多少は可能である。東北アジア地域のように堆積速度が遅い等の原因で、遺構出土炭化物の帰属時期の把握が困難な場合は、土器付着炭化物の年代値もあわせて総合的に検討する方針が必要になる。

#### (a) 日本における鈴谷式の現状

現状で、日本における鈴谷式の<sup>14</sup>C年代値は皆無といつてよい。そのため、鈴谷式の年代を議論するためには、鈴谷式前後に位置する声間川大曲Ⅲ群B類等〜十和田式期にかけての年代値から推定するほかない。表3-1に、北海道の縄文時代前半頃(恵山式、宇津内Ⅱa式等)からの年代値を集成した。白杵編〔二〇〇五・二〇〇七・二〇〇八〕において、すでに集成がなされているが、その後報告された年代値に関しても付け加えた。AMS法による年代値のみを集成しているが、筆者の把握していない報告に関しては、容赦頂きたい。木炭等(土器付着物以外)の年代では、道南地域で恵山式が2230〜2020BP、道東地域では宇津内Ⅱa式が2200〜1930BP、宇津内Ⅱb式が2140(3300BPは除外)〜1940BPである。恵山式と宇津内Ⅱa・Ⅱb式は、年代的には比較的併行し(宇津内Ⅱb式の新しい年代値以外)、暦年較正年代値は約400calBC〜100calADに相当する。後北式の年代に関しては、後北A・B式が2090〜1920BP、後北

C<sub>1</sub>式が1950・1810BP、後北C<sub>2</sub>・D式が2010〜1700BPである。後北C<sub>1</sub>・D式の暦年較正年代値は約1calBC〜400calADになる。後続する北大式は、北大I式が1610〜1570BP、北大II式が1620BPであり、約400〜500calAD頃が想定される。十和田式期は、利尻富士町役場遺跡で2190・2010BP、青苗砂丘遺跡で1770BPがある。

以上の年代値に関して重複する部分を少し整理すると、道東北部地域では、宇津内Ⅱa・Ⅱb式が紀元前四世紀〜二世紀頃、後北C<sub>2</sub>・D式が二〜五世紀、北大I・II式が約五世紀〜六世紀前半頃になる。後北A〜C<sub>1</sub>式は年代値が多くないが、紀元前二世紀〜二世紀頃と想定される。十和田式期は判断が非常に難しいが、報告された年代値をそのまま解釈すると、紀元前四世紀〜紀元前後、もしくは三〜四世紀前半頃になる。前者は土器編年と整合性のとれない年代であり、後者の可能性が高い。ただし、後者を採用しても北大I式の約五世紀を一〇〇年程度遡る可能性があるため、慎重な議論が必要になる。鈴谷式と道内地域の土器型式の確実な共存関係は現状で不明瞭である。今のところ出土土器の共存状況等から、後北C<sub>1</sub>〜後北C<sub>2</sub>・D式頃に併行すると考えられており、上記の年代を参考にすると、鈴谷式の年代は約一世紀〜五世紀頃と推測される。

#### (b) サハリンにおける鈴谷式の現状

サハリンにおける鈴谷式の年代値は、ワシレフスキー〔二〇〇二・二〇〇三〕で議論されている。また、上述の白杵編〔二〇〇五・二〇〇七・二〇〇八〕でも集成がなされている。これらの関連文献等から、一部のコンテキストを読み取れない資料を除いて、新石器時代後期や古金属器時代の年代値も含めて再集成したものが表3-2になる。

最近、サハリン北部の調査が進み、鈴谷式の前段階と考えられる新石器時代後期や古金属器時代の様相が解明されつつある〔ワシレフスキーほか二〇〇九〕。サハリン北部のチャイボ1・6、レベヂヌイ1、カシカレ

バグシ2遺跡では、ナビリ文化(2490～2395BP)・ピリトゥン文化(2440～2030BP)の年代値が報告されている。ナビリ文化とピリトゥン文化は比較的近接した時期であり、ナビリ文化の方がやや先行するようである。較正した両文化の年代は、紀元前八世紀～紀元前後になる。2500～2400BPの年代は、弥生開始年代で話題になった、いわゆる「二五〇〇年問題」の年代範囲に入るため、上限年代は紀元前五～八世紀の範囲内と考えられる。日本との関係では、縄文時代晩期～宇津内Ⅱ式や後北C式頃に相当する。両文化と鈴谷式の関係は本項で論ずるべきことではないが、日本で推測されている鈴谷式の年代よりかなり古い時期に位置づけられる点は理解しておく必要がある。

サハリンの鈴谷式に関しては、ワシレフスキー(二〇〇二・二〇〇三)で指摘されているように、非常に幅広い年代値が報告されている。素直に鈴谷式の存続期間が長かったと解釈することも可能だが、コンテキストが比較的明確な資料に関して、少し状況を整理しておきたい。現状で最も古い年代値は、クズネツォーボイ遺跡(2層・炉)の2750BP、ウスチアインスコエ(二〇〇三年調査・住居の炉)の2550BPである。前者はβ線法測定で測定時期が古いことや、同遺跡の同一コンテキストで年代値がばらついていることを考慮すると、やや信頼性は低い。対して、後者は住居の炉出土資料であり、状況も明確である(山浦二〇〇三)。ワシレフスキー(二〇〇三)によると、同遺跡が立地する砂丘の黒色層(人が移住後)の年代値は2340BPであり、この年代値とも矛盾しない。ただし、土器付着物が炉出土炭化物と同年代の2540BPであり、土器付着物が海洋リザーバー効果の影響を受けて古く得られることを考慮すると、やや疑問も残る。最も新しい年代に関しては、アジョールスク1遺跡(第一五号住居)で2070～1590BP、ススヤ1遺跡(発掘区)で1850BPの報告がある。いずれもβ線法の年代値であるため、上述の日本の状況と直接比較するのは慎重になる必要があるが、少し若い年代値も得られている。土

器付着炭化物の年代値は、上述のウスチアインスコエ、ペロカメンナヤ、アジョールスク1遺跡で2540～2300BP(六点)の報告がある。海洋リザーバー効果の影響を500BP程度と仮定すると、約2000～1800BP程度と考えることも可能で、日本の推定年代範囲とよく一致する。話を鈴谷式の上限年代が遡るか否かに戻すと、上述のウスチアインスコエの年代値のほかに、ススヤ1遺跡(発掘区)で2520BP、クズネツォーボイ遺跡(二層・炉)で2384BP、ポレチエ1遺跡で2365・2315BPの比較的古い年代値が報告されている。特に、ポレチエ1遺跡の資料はAMS法の測定値であり、信頼性も高そうである。2300BP台の年代は、上述の「二五〇〇年問題」をぬけた年代範囲になり、日本の土器型式では弥生時代前期の砂沢式頃にあたる。

以上のことから、サハリンの鈴谷式の年代は、日本での推測範囲を大幅に遡る年代が想定される。ただし、ウスチアインスコエ遺跡やポレチエ1遺跡のデータ以外は、β線法の測定値が多く、AMS法と比較して確度が低い可能性もある。両遺跡のデータが何らかの影響で古く得られていることを証明できれば、日本と整合的な状況と考えることも無理ではない。今後は、ウスチアインスコエ遺跡が所在する中部サハリンにおける様相の把握やデータの蓄積、サハリン北部の文化との関係について注視する必要がある。やや歯切れは悪いが、現状でサハリンの鈴谷式の年代は、紀元前四世紀～六世紀頃と幅広く考えておく。

#### (c) 常呂川河口および利尻富士町役場遺跡の検討

今回、常呂川河口遺跡(北見市)と利尻富士町役場遺跡(利尻富士町)出土の鈴谷式土器の付着炭化物について年代測定を実施することにした。多くの先行研究(詳しくは國木田二〇一一等)で明らかのように、北海道の土器付着炭化物は海洋リザーバー効果の影響を受けて、木炭等の年代より数百年古い年代値が得られる。この年代差は、平均で約500BP

程度であることが多いが、必ずしも各地域や時期で一定ではない。近年の研究では、貝塚出土の炭化物と貝のペーア試料から海洋リザーバー効果地域オフセット値(ΔR)を評価する研究がいくつかある〔詳しくは白杵・國木田二〇一四〕。それらによると、日本海やオホーツク海沿岸地域に生息する貝類は、宗谷暖流等の影響を受けて海洋リザーバー効果は小さく、噴火湾周辺や釧路は、北太平洋の深層水の影響で大きくなる。海獣類やサケ・マス類は、これらの海流域を超えて活動するため、評価が難しい。このような現状を考慮し、今回は鈴谷式前後の土器付着物と遺構出土炭化物を比較検討し、その年代差を加味して、鈴谷式の年代を考察することにした。

常呂川河口遺跡では、後北C<sub>2</sub>・D式期の五七号竪穴床面のやや浮いた場所から鈴谷式が出土し、周辺からは北大I式も出土している〔武田編二〇〇二〕。そのため、鈴谷式とあわせて後北C<sub>1</sub>式、後北C<sub>2</sub>・D式、北大I式の土器付着物、後北C<sub>2</sub>・D式期の遺構に伴った木炭や炭化植物遺体を測定試料とした。利尻富士町役場遺跡では、鈴谷式とあわせて後北C<sub>1</sub>式、オホーツク文化の十和田式期、刻文期の土器付着物、焼失住居の炭化材を測定試料とした。二号住居(刻文期)、三号住居(十和田式期)はすでに報告書で年代値が報告されているが、比較検討するために今回は別個体にて測定を行った。なお、四号住居が鈴谷式期であり、今回未報告の出土樹皮片の測定も行ったが、近世以降の結果であった。

分析試料は、常呂川河口遺跡で土器付着物一二点(鈴谷式一点、後北C<sub>1</sub>式一点、後北C<sub>2</sub>・D式九点、北大I式一点)、木炭と炭化植物遺体四点(後北C<sub>2</sub>・D式が中心)の計一六点である。利尻富士町役場遺跡では、土器付着物九点(鈴谷式三点、後北C<sub>1</sub>式一点、十和田式期三点、刻文期二点)、木炭等三点(十和田式期一点、刻文期一点、その他一点)の計一二点である。上述のサハリン多蘭泊出土資料は、内外面の土器付着物二点の測定を行った。試料の詳細は表4に示している。常呂川河口遺跡の後北C<sub>2</sub>・D式に

関しては、熊木〔二〇〇二〕を参考にⅠ～Ⅲ期に区分した。<sup>14</sup>C年代測定における試料調製は、通常の方法にしたがって行った〔吉田二〇〇四〕。化学処理におけるアルカリ処理濃度は、試料が全て溶解しない程度にとどめた。試料の化学処理取率等を表6に示した。暦年較正年代値はOxCal v4.2.4〔Bronk Ramsey, 2013〕を用い、IntCal13と較正した(表5)。測定は、東京大学総合研究博物館のタンデム加速器(MALT)を用いた。炭素・窒素同位体比の測定はS Iサイエンス株式会社に依頼した。

測定結果を表5に示している。まず遺構出土炭化物であるが、常呂川河口遺跡の後北C<sub>2</sub>・D式が1985～1625BPであった。TK73-48aHの古い年代値が得られているが、同試料は後北C<sub>1</sub>式の可能性もあるため、妥当な年代値と評価できる。先行研究の集成で後北C<sub>2</sub>・D式は、2010～1700BPであり、今回の1760～1625BPはやや新しい年代を含んでいるが、北大I式が1610～1570BPであることを考慮すると、総合的に判断できる。次に、利尻富士町役場遺跡の焼失住居出土の炭化材であるが、十和田式期が1970BP、刻文期が1405BPであった。同コンテキストの試料は、既知報告で前者が2010BP、後者が1490BPであり〔山谷編二〇一一〕、今回の結果とも比較的整合的である。今回の暦年較正年代は、十和田式期が紀元前後、刻文期が七世紀である。同遺跡の十和田式期に関する年代に関しては(2220～2010BP)三点)、報告書内でも指摘される通り、考古学的に想定される年代と比較して大幅に古い。今回の結果からも古い年代値であることは確実で、十和田式期の上限年代を大きく遡らせるか、同試料を住居に伴わないと判断するか、いずれかである。同遺跡では、一号墓の年代も古いことを考慮すると、コンテキストを誤認している可能性は低いかもしれない。青苗砂丘のデータでは1770BP(暦年較正年代で三～四世紀)があり、この年代も考古学的に想定される年代よりやや古い。現状で十和田式期の年代は上述の試料しかなく、本項で詳細な考察を行うことは困難である。今後、十和田式期の年代に関しては注視す

る必要がある。刻文期1405BPは、モヨロ貝塚やウトロ遺跡と比較してやや新しい結果であるが、既知報告の範囲内である。

次に土器付着物のデータについて考えてみたい。土器付着物の年代は、鈴谷式が2590～2140BP、後北C<sub>1</sub>式が2480～2020BP、後北C<sub>2</sub>・D式(I期)が2515～2500BP、後北C<sub>2</sub>・D式(II期)が2530～1815BP、後北C<sub>2</sub>・D式(III期)が2275～1900BP、北大I式が2070BP、十和田式期が2120～2045BP、刻文期が2200～2160BPであった(図7)。サハリン多蘭泊出土試料も、北海道の試料と近い年代であった。炭素・窒素同位体比の検討から、後北C<sub>1</sub>式で一点、後北C<sub>2</sub>・D式で三点(計四点)が陸上由来の動植物と判断でき、同試料の年代値は他試料と比較して非常に新しい(図5、図7)。北海道の土器付着炭化物で、このような陸上動植物の影響が確認されたデータは類例が少ない。ただし、炭化植物遺体と同じ年代ではなく、数百年古いことから多少の海産物の寄与があったものと考えられる。その他の試料は、窒素同位体比が高く、炭素同位体比も重い傾向があるため、海産の内容物であった可能性が高い。陸上由来四点を除いた比較(図7)では、鈴谷式、後北C<sub>1</sub>式、後北C<sub>2</sub>・D式が比較的近い年代であり、一部の鈴谷式が最も古い結果になっている。後北C<sub>2</sub>・D式の中では、I期が古く、II期やIII期が新しい傾向がある。北大I式、十和田式期、刻文期は比較的近い年代であるが、考古学的な編年と逆転した結果となっている。このことは、十和田式期や刻文期の試料で、一部C/N比が高い傾向があり、内容物の差に起因するものかもしれない。土器付着物と遺構出土炭化物の年代差は、常呂川河口遺跡の後北C<sub>2</sub>・D式で約600～800BP、利尻富士町役場遺跡の十和田式期で約100BP、刻文期で約800BPである。住居ごとの比較では、常呂川河口遺跡の五七号で770BP、六九号で835～805BP、利尻富士町役場遺跡の三号で150～130～75BPである。十和田式期における年代差がほとんどない状況は、炭素・窒素同位体比の傾向から判断して理解し難い。ただし、このような土器付着炭化物と遺構出土炭

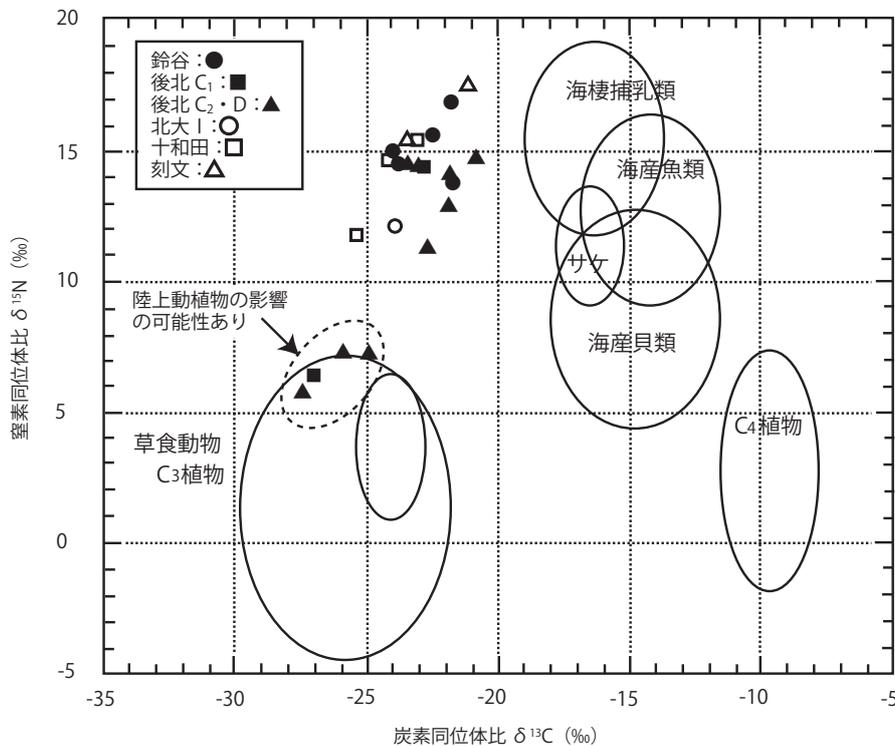


図5 内面土器付着炭化物の炭素・窒素同位体比〔範囲は吉田・西田2009より引用〕

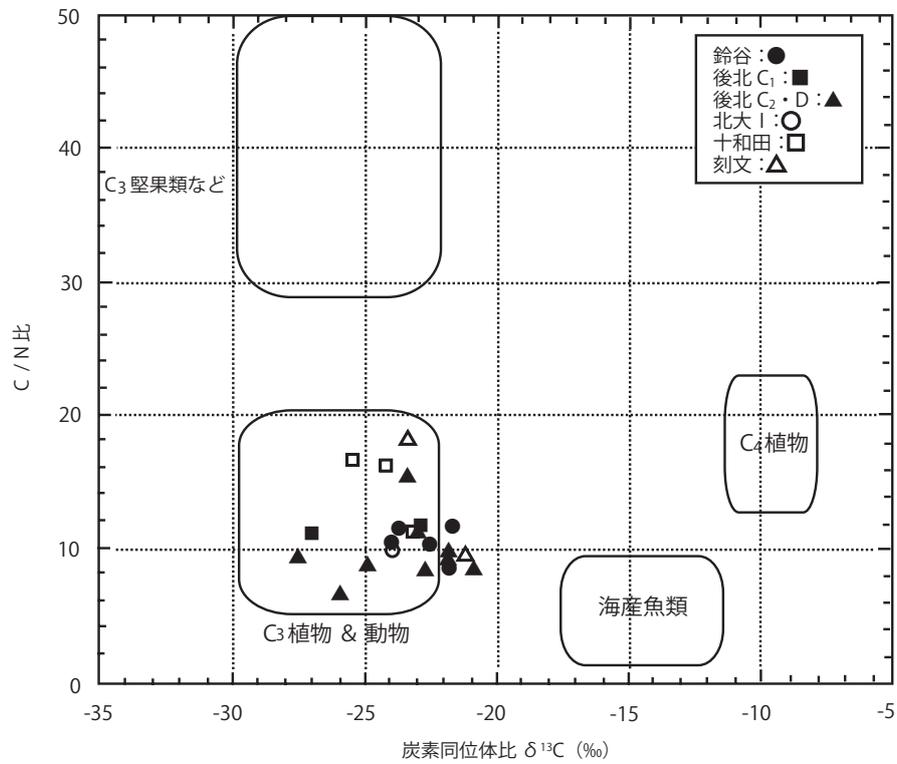


図6 内面土器付着炭化物の炭素同位体比・C/N比 [範囲は吉田・西田 2009 より引用]

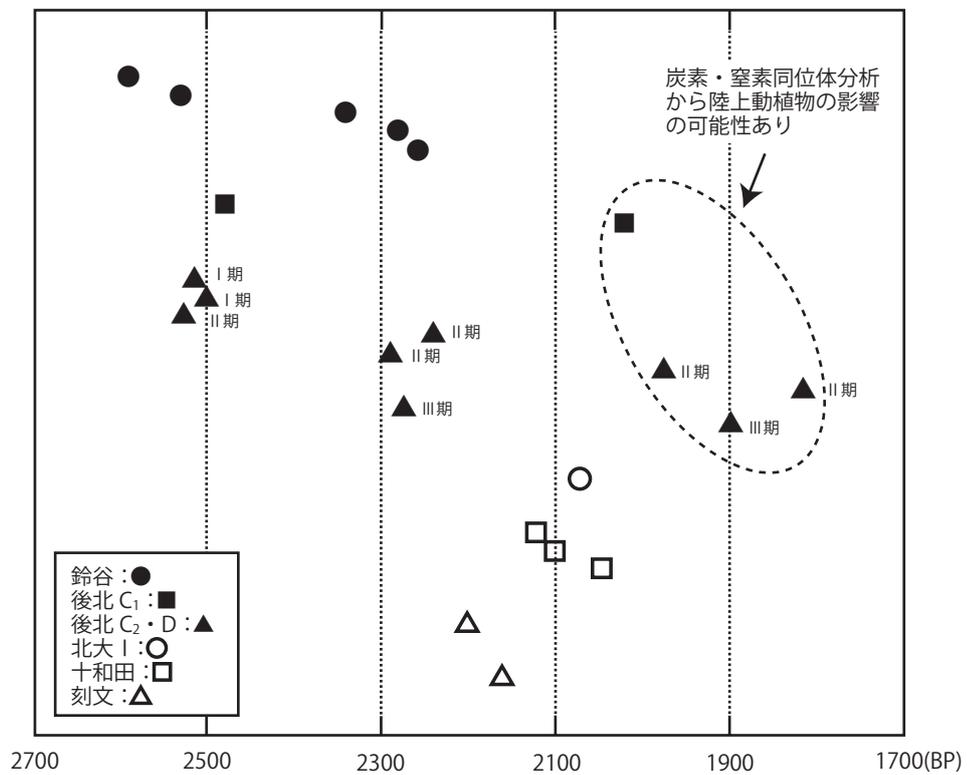


図7 内面土器付着物の<sup>14</sup>C年代値

化物で年代差がない類例は、上述のウスチアインスコエでも確認されており、今後データを蓄積して検討していかなければならない。ひとまず、両遺跡の年代差を約800BPと仮定し、鈴谷式の年代に当てはめると、約1790～1460BPと評価できる。この年代は、上述の後北C<sub>2</sub>D式(2010～1700BP)や北大I式(1610～1570BP)に近う年代であり、二～六世紀頃になる。海洋リザーバー効果の影響は試料ごとに異なるため、多少の振れ幅があるだろうが、紀元前を大幅に遡る可能性は低い。

#### ④ 鈴谷式土器編年に関する展望——まとめにかえて——

本稿では、柳田が樺太紀行にて足跡を残した「ソロイヨフカ」(南貝塚)に関する当時の考古学的な状況を振り返りつつ、この遺跡とも関連する鈴谷式土器について編年の再検討を試みた。最後に、本稿での検討結果に基づいて鈴谷式土器編年に対する今後の展望を述べ、まとめとしたい。

本稿の後半では北海道とサハリンにおける鈴谷式前後の年代集成を行い、両地域における年代の現状を整理した。また、あらたに常呂川河口遺跡、利尻富士町役場遺跡、サハリン多蘭泊出土試料について年代測定を実施し、鈴谷式の年代について考察を行った。鈴谷式における年代の大きな課題は、上限年代が遡るか否かである。年代集成の結果では、サハリンで紀元前四世紀～六世紀頃と非常に幅広く、日本では約一世紀～五世紀頃でサハリンの新しい時期に相当する年代が考えられた。常呂川河口遺跡、利尻富士町役場遺跡の検討では二～六世紀頃と判断でき、従来の日本の「間隙説」編年と整合的な結果であった。現状において年代値のみでの解釈としては、サハリンで紀元前数百年頃に鈴谷式が成立し、しばらく継続後、その新しい段階になって日本に影響を及ぼしたと考えるのが妥当である。

このような解釈は本稿でも紹介した近年のロシア側の研究者の年代観

に近いものであり、もしこの解釈が正しいのであれば、最近の調査成果に基づいて提唱された上述のカシカレバグシ文化、ピリトゥン文化、ナビリ文化といったサハリン北部の諸文化や、アムール河口域と関連の強いバリシャヤブタ式系統の土器は、鈴谷式と年代的に近接していることになる。そうであるならば、これら諸文化の土器型式との系統関係や型式交渉を具体的に検討する、という研究の方向性が支持されることになる。特に型式学的特徴においてより類似度の高い鈴谷式、ピリトゥン文化、ナビリ文化の三者の土器型式については、型式交渉が存在した可能性が高いことが予想されよう。また、続縄文期初頭に位置づけられるサハリン南部のアニワ文化(ワシレフスキー一九九二・二〇〇三)<sup>(5)</sup>や、北海道北端部のメクマ式や声問川大曲Ⅲ群B類などの土器群と鈴谷式の関係性も、あらためて検討する必要がある(熊木二〇〇三)。

一方でこのような年代値からの解釈が正しいとするならば、本文の表1に示した鈴谷式土器の細別案に関しては、最古段階とされる「タイプA1」が北海道に存在するとされているため、再考を余儀なくされる。すなわち、表1の編年表内で前後関係を組み替える、あるいはタイプA1より古い段階の未知の型式を想定する、<sup>(6)</sup>などの変更が検討されなければならない。また、サハリンにおいて鈴谷式が成立してから、北海道へ南下するまでの間に時間的な間隔があるとすれば、続縄文期初頭から鈴谷式の南下までの間、宗谷海峡間の交流は一時的にはあるがほぼ断絶したことになる。このような地域間関係の変化が生じていたのかどうか、あるとすればその背景は何か、という問題も浮上してくる。

このように、今回の年代測定結果から導き出された解釈は、従来の型式編年案では説明しきれない型式変化の過程を描き出すこととなった。このような解釈が考古学的に成立するのかわるか、現段階で結論を出すことは難しく、今後、慎重な検討を行う必要がある。

謝辞

貴重な資料を寄贈していただいた豊原熙司氏に厚く御礼申し上げます。また、年代測定試料の収集にあたり、利尻富士町教育委員会の山谷文人氏にはひとかたならぬお世話になりました。サハリンの最新動向に関しては、A. A. ワシレフスキー氏とV. A. グリシェンコ氏から情報提供を受けました。記して感謝の意を申し上げます。

註

- (1) この点に関して、伊東も南貝塚式について、「ソロウイヨフカ貝塚から出土する様な土器を意味するのではなく、その近くにある堅穴からの発掘品によって名付けたものであるから、厳密には南貝塚堅穴式とよぶべきものである」(伊東一九四二・二五)と述べている。
- (2) 河野報告の遺跡とカリーニナ二遺跡は同一の遺跡である可能性があるが、情報が少ないため特定することはできなかった。
- (3) 伊東は繩の側面圧痕に対して「撚糸文(繩目文)」の用語を用いたが、以下の本文では回転圧痕との混同が生じないように、側面圧痕に対しては「繩線文」の用語を用いる。
- (4) ただし、ウラハン・セゲレンニヤフスカヤ文化の年代については、古い測定による数値が採用されているし、提示された年代をみても、バリシヤブフタ式の間にはまだ大きな年代差がある。また、中間地域の様相もよくわからない。
- (5) 本文で言及した、伊東信雄の設定した遠淵式土器は、このアニワ文化の土器群の一部に含まれると考えられる。
- (6) 続縄文期初頭と鈴谷式の間未知の型式を想定するならば、本文で引用した「連続説」(小野・天野二〇〇二)と考え方は近くなるが、現存する資料のなかからこの時期の型式内容の具体像を提示するのは未だ困難であろう。

表 3-1 北海道における鈴谷式前後の<sup>14</sup>C年代値

No.	遺跡名	試料番号	土器型式	出土遺構	引用文献, 図版番号ほか	試料種類	<sup>14</sup> C年代 (BP)	Lab.No.
1	恵山貝塚	ESANshika	恵山	調査坑 15(遺構 8号覆土, 盛土遺構)	西脇編(2004)	シカ大腿骨(フローテーション採取)	2040 ± 40	Beta-186174
2		ESANhirame	恵山	調査坑 15(遺構 8号覆土, 盛土遺構)	西脇編(2004)	ヒラメ椎骨(フローテーション採取)	2630 ± 40	Beta-186175
3			恵山(古段階)	調査坑 25(大 100-560区, 土壇覆土)	田中・藤井編(2005)	炭化材	2230 ± 40	PLD-3157
4			恵山(中段階)	調査坑 7(大 180-560区, 盛土遺構上部)	田中・藤井編(2005)	炭化材(No.3)	2100 ± 40	PLD-3155
5			恵山(中段階)	調査坑 7(大 180-560区, 盛土遺構上部)	田中・藤井編(2005)	炭化材(No.5)	2040 ± 40	PLD-3156
6	森川 3	MK3-2	恵山	焼土(F-6)	谷島ほか編(2005)	炭化物(フローテーション採取)	2060 ± 40	Beta-174531
7		MK3-13	恵山	焼土(F-16)	熊谷・谷島編(2006)	炭化物	2110 ± 40	IAAA-51437
8		MK3-16	恵山	焼土(F-13)	熊谷・谷島編(2006)	炭化物	2020 ± 40	IAAA-51438
9	常呂川河口	USTK05-4	宇津内 II a	21号竪穴	白杵編(2007)	炭化材(木炭)	2150 ± 30	IAAA-52406
10		USTK05-6	宇津内 II a	21号竪穴, 床面	白杵編(2007) 武田編(1996), 第122図-1	土器付着炭化物 (口縁部外面)	2570 ± 40	IAAA-52408
11	谷田	USSH-2	宇津内 II a	竪穴(PIT111)	白杵編(2007)	炭化材(木炭)	1930 ± 30	IAAA-61403
12		USSH-2(r)					1950 ± 30	IAAA-61404
13		USSH-4	宇津内 II a	竪穴(PIT120)	白杵編(2007)	種実? (クルミ片?)	2130 ± 30	IAAA-61406
14		USSH-1	宇津内 II a・II b	竪穴(PIT109)	白杵編(2007)	炭化材(木炭)	1940 ± 30	IAAA-61402
15		USSH-3	宇津内 II b	竪穴(PIT119)	白杵編(2007)	炭化材(木炭)	1970 ± 30	IAAA-61405
16		USSH-5	後北 A ~ B	竪穴(PIT124)	白杵編(2007)	炭化材(木炭)	2150 ± 30	IAAA-61407
17	オシヤマツブ川	USSH-6	宇津内 II b	竪穴(PIT1)	白杵編(2007)	炭化材(木炭)	2100 ± 30	IAAA-61408
18		USSH-6(r)					2140 ± 30	IAAA-62455
19	ウトロ	No.1(2004年度)	宇津内 II a	竪穴住居(PIT1), 床面直上	松田編(2011)	炭化物	2200 ± 60	Beta-201585
20		No.3(2005年度)	宇津内 II a	土坑墓(PIT21)	松田編(2011)	炭化材	2100 ± 40	Beta-213769
21		No.2(2004年度)	宇津内 II b	竪穴住居(PIT2), 炉跡	松田編(2011)	炭化物	2300 ± 60	Beta-201586
22		No.3(2004年度)	宇津内 II b	竪穴住居(PIT2), 床面直上	松田編(2011)	炭化物	2060 ± 60	Beta-201587
23		No.1(2005年度)	宇津内 II b	竪穴住居(PIT22)	松田編(2011)	炭化材	2020 ± 50	Beta-213767
24	北広里 3	No.1	後北 A 主体・宇津内 II b	焼土(FP-5)	森田編(2003)	炭化物 (クルミ内果皮)	2090 ± 40	Beta-184697
25	オニキシバ 2		後北 B	集中区 6(焼骨片集中 中 III BB-70)	天方編(2011)	木炭	1920 ± 30	IAAA-81988
26	K39		後北 B	炉址(HE01), 7層	小杉ほか編(2015)	木炭	1910 ± 20	IAAA-130420
27	(大学病院 ゼミナール 棟地点)		後北 B	炉址(HE01), 7層	小杉ほか編(2015)	木炭	2040 ± 30	IAAA-130421
28			後北 B	焼土粒集中(DB01), 7層	小杉ほか編(2015)	木炭	2010 ± 30	IAAA-130422
29			後北 B	焼土粒集中(DB01), 7層	小杉ほか編(2015)	木炭	2020 ± 20	IAAA-130423
30			後北 B	炭化物集中(DC02), 7層	小杉ほか編(2015)	木炭	1950 ± 30	IAAA-130424

表 3-1-2 北海道における鈴谷式前後の <sup>14</sup>C 年代値

No.	遺跡名	試料番号	土器型式	出土遺構	引用文献, 図版番号ほか	試料種類	<sup>14</sup> C 年代 (BP)	Lab.No.
31			後北 B	炭化物集中 (DC02), 7 層	小杉ほか編 (2015)	木炭	1900 ± 20	IAAA-130425
32	K514	K514-3	後北 B	東区, 屋外炉 (6HE07)	石井編 (2004)	炭化材 (ヤマグワ, フローテーション 採取)	2010 ± 40	IAAA-30168
33		K514-2	後北 B	東区, 屋外炉 (6HE02)	石井編 (2004)	炭化材 (ヤマグワ, フローテーション 採取)	1970 ± 40	IAAA-30167
34		K514-4	後北 C <sub>1</sub>	西区, 焼土粒集中 (6DB06)	石井編 (2004)	炭化材 (ヤマグワ, フローテーション 採取)	1950 ± 40	IAAA-30169
35		K514-1	後北 C <sub>1</sub>	炭化物集中 (5DC05)	石井編 (2004)	炭化材 (ヤマグワ, フローテーション 採取)	1810 ± 40	IAAA-30166
36	K435 (第 2 次調査)		後北 C <sub>2</sub> ・D	第 1 号炉跡 (HE-1)	仙庭編 (2000)	炭化材	1870 ± 50	Beta-126128
37			後北 C <sub>2</sub> ・D	第 2 号炉跡 (HE-2)	仙庭編 (2000)	炭化材	1910 ± 50	Beta-126129
38			後北 C <sub>2</sub> ・D	第 5~6 号炉跡周辺 炭化物層 (HE-5DC)	仙庭編 (2000)	炭化材	1800 ± 30	Beta-126130
39			後北 C <sub>2</sub> ・D	第 6 号炉跡 (HE-6)	仙庭編 (2000)	炭化材	1800 ± 50	Beta-126131
40			後北 C <sub>2</sub> ・D	第 1 号炭化物集中 (DC-1)	仙庭編 (2000)	炭化材	1840 ± 50	Beta-126132
41			後北 C <sub>2</sub> ・D	第 5 遺物集中地点, P05A	仙庭編 (2000)	土器付着炭化物	2330 ± 50	Beta-126133
42	K39 (第 9 次 調査)	K39N19-2	後北 C <sub>2</sub> ・D	屋外炉 (7HE01)	石井編 (2002)	炭化材 (フローテ ーション採取)	1730 ± 40	Beta-152415
43		K39N19-3	後北 C <sub>2</sub> ・D	屋外炉 (7HE02)	石井編 (2002)	炭化材 (フローテ ーション採取)	1700 ± 40	Beta-152416
44		K39N19-4	後北 C <sub>2</sub> ・D	焼土粒集中 (7DB08)	石井編 (2002)	炭化材 (フローテ ーション採取)	1790 ± 40	Beta-152417
45	K135 (4 丁 目地点)	HDSP-24	後北 C <sub>2</sub> ・D (新)	焼土 16 (Ⅲ a 層)	西本編 (2009)	種実 (クルミ)	1760 ± 40	Beta-204000
46		HDSP-26	後北 C <sub>2</sub> ・D (新)	焼土 14 (Ⅲ a 層)	西本編 (2009)	種実 (クルミ)	1840 ± 40	Beta-204001
47		HDSP-27	後北 C <sub>2</sub> ・D (古)	焼土 85 (Ⅶ c 層)	西本編 (2009)	種実 (クリ)	1940 ± 40	Beta-204002
48		HDSP-29	後北 C <sub>2</sub> ・D (古)	焼土 92 (Ⅶ c 層)	西本編 (2009)	種実 (クリ)	1900 ± 40	Beta-204003
49	K135 (第 4 次調査)	K135-04	後北 C <sub>2</sub> ・D	第 9 号屋外炉 (6HE09)	出穂編 (2005)	炭化材	1810 ± 40	Beta-188441
50		K135-05	後北 C <sub>2</sub> ・D	第 4 号炭化物集中 (6DC04)	出穂編 (2005)	炭化材	2010 ± 40	Beta-188442
51		K135-06	後北 C <sub>2</sub> ・D	第 16 号屋外炉 (6HE16)	出穂編 (2005)	炭化材	1830 ± 40	Beta-188443
52		K135-07	後北 C <sub>2</sub> ・D	第 14 号焼土粒集中 (6DB14)	出穂編 (2005)	炭化材	1890 ± 40	Beta-188444
53		K135-08	後北 C <sub>2</sub> ・D	第 18 号屋外炉 (6HE18)	出穂編 (2005)	炭化材	1810 ± 40	Beta-188445
54		K135-09	後北 C <sub>2</sub> ・D	第 19 号屋外炉 (6HE19)	出穂編 (2005)	炭化材	1700 ± 40	Beta-188447
55		K135-10	後北 C <sub>2</sub> ・D	第 6 号炭化物集中 (8DC06)	出穂編 (2005)	炭化材	1790 ± 40	Beta-188448
56	K518 (第 1 次調査)	K518-3	後北 C <sub>2</sub> ・D	焼土粒集中 (DB02)	秋山編 (2007)	炭化材 (トネリコ)	1940 ± 50	IAAA-30172
57		K518-02	後北 C <sub>2</sub> ・D	焼土粒集中 (DB07)	秋山編 (2007)	炭化材	1830 ± 40	Beta-188461
58		K518-03	後北 C <sub>2</sub> ・D	焼土粒集中 (DB07)	秋山編 (2007)	炭化材	1990 ± 40	Beta-188462
59	K518 (第 2 次調査)	K518-04	後北 C <sub>2</sub> ・D	炉跡 (2HE04)	柏木編 (2009)	炭化材	1910 ± 40	Beta-213751
60		K518-05	後北 C <sub>2</sub> ・D	炉跡 (2HE10)	柏木編 (2009)	炭化材	1720 ± 40	Beta-213752

表 3-1-3 北海道における鈴谷式前後の<sup>14</sup>C年代値

No.	遺跡名	試料番号	土器型式	出土遺構	引用文献, 図版番号ほか	試料種類	<sup>14</sup> C年代 (BP)	Lab.No.
61	K518(第3次調査)	K518-20	後北 C <sub>2</sub> ・D	炉跡(6HE01)	小針編(2011)	炭化物 (クルミ属)	1870 ± 30	IAAA-102183
62	C537	C537-5	後北 C <sub>2</sub> ・D	第47号屋外炉跡(HE47)	高橋編(2012)	炭化物	1790 ± 30	IAAA-92815
63		C537-6	後北 C <sub>2</sub> ・D	第51号屋外炉跡(HE51)	高橋編(2012)	炭化物	1750 ± 30	IAAA-92816
64		C537-7	後北 C <sub>2</sub> ・D	第53号屋外炉跡(HE53)	高橋編(2012)	炭化物	1820 ± 30	IAAA-92817
65		C537-8	後北 C <sub>2</sub> ・D	第53号屋外炉跡(HE53)	高橋編(2012)	炭化物	1850 ± 30	IAAA-92818
66		C537-9	後北 C <sub>2</sub> ・D	第45号屋外炉跡(HE45)	高橋編(2012)	炭化物	1800 ± 30	IAAA-92819
67		C537-10	後北 C <sub>2</sub> ・D	第45号屋外炉跡(HE45)	高橋編(2012)	炭化物	1720 ± 30	IAAA-92820
68		C537-11	後北 C <sub>2</sub> ・D	第8号屋外炉跡(HE08)	高橋編(2012)	炭化物	1840 ± 30	IAAA-92821
69		C537-13	後北 C <sub>2</sub> ・D	第10号炭化物集中(DC10)	高橋編(2012)	炭化物	1860 ± 30	IAAA-92823
70		C537-14	後北 C <sub>2</sub> ・D	第17号炭化物集中(DC17)	高橋編(2012)	炭化物	1870 ± 30	IAAA-92824
71	K39	試料 No.18	後北 C <sub>2</sub> ・D	屋外炉址(HE01)	小杉ほか編(2011)	炭化材(小片複数, AAA未処理)	1690 ± 20	PLD-15187
72	(北キャンパス道路地点)	試料 No.63	後北 C <sub>2</sub> ・D	屋外炉址(HE02)	小杉ほか編(2011)	炭化物	1785 ± 20	PLD-15188
73		試料 No.74	後北 C <sub>2</sub> ・D	屋外炉址(HE03)	小杉ほか編(2011)	炭化物	1825 ± 20	PLD-15189
74		試料 No.75	後北 C <sub>2</sub> ・D	焼土粒集中箇所(DB01)	小杉ほか編(2011)	炭化物	1780 ± 20	PLD-15190
75		試料 No.76	後北 C <sub>2</sub> ・D	焼土粒集中箇所(DB02)	小杉ほか編(2011)	炭化物	1785 ± 20	PLD-15191
76		試料 No.79	後北 C <sub>2</sub> ・D	焼土粒集中箇所(DB04)	小杉ほか編(2011)	炭化物	1780 ± 20	PLD-15192
77	K39	試料 1	後北 C <sub>2</sub> ・D	屋外炉址(HE01)	小杉ほか編(2006)	炭化材	1790 ± 25	PLD-4588
78	(創成科学研究棟南地点)	試料 2	後北 C <sub>2</sub> ・D	屋外炉址(HE04)	小杉ほか編(2006)	炭化材	1785 ± 25	PLD-4589
79		試料 5(USK39-1)	後北 C <sub>2</sub> ・D	屋外炉址(HE02)	小杉ほか編(2006)	炭化材	1740 ± 30	IAAA-52373
80		試料 6(USK39-2)	後北 C <sub>2</sub> ・D	屋外炉址(HE03)	小杉ほか編(2006)	炭化材	1770 ± 30	IAAA-52374
81		試料 7(USK39-3)	後北 C <sub>2</sub> ・D	屋外炉址(HE04)	小杉ほか編(2006)	炭化材	1770 ± 30	IAAA-52375
82	幌内 D	HD-D27	後北 C <sub>2</sub> ・D(終末)	土坑(P-160)	鈴木編(2014)	炭化材	1700 ± 20	PLD-23904
83		HD-D31	後北 C <sub>2</sub> ・D(終末)	土坑(P-182)	鈴木編(2014)	炭化材	1750 ± 20	PLD-23908
84		HD-D12	北大 I	土坑(P-51)	鈴木編(2014)	炭化種実 (クルミ)	1610 ± 15	PLD-23889
85		HD-D26	北大 I	土坑(P-159)	鈴木編(2014)	炭化材	1575 ± 15	PLD-23903
86		HD-D28	北大 I	土坑(P-163)	鈴木編(2014)	炭化植物遺体 (タケ亜科)	1595 ± 15	PLD-23905
87		HD-D29	北大 I	土坑(P-163)	鈴木編(2014)	炭化材	1570 ± 20	PLD-23906

表 3-1-4 北海道における鈴谷式前後の<sup>14</sup>C年代値

No.	遺跡名	試料番号	土器型式	出土遺構	引用文献, 図版番号ほか	試料種類	<sup>14</sup> C年代 (BP)	Lab.No.
88	K113(北 34 条地点)	HDSP-32	北大Ⅱ	焼土 9(9b 層)	西本編(2009)	種実(クルミ)	1620 ± 40	Beta-204004
89	柏木川 7	No.1	北大Ⅱ～Ⅲ	19号焼土	長町編(2004)	炭化材	1460 ± 40	IAAA-31287
90	C544	C544-3	北大Ⅱ～Ⅲ	炉跡(4HE04)	田中編(2012)	炭化材	1480 ± 30	IAAA-102234
91		C544-4	北大Ⅱ～Ⅲ	土坑(4PT04)	田中編(2012)	堅果	1500 ± 30	IAAA-102235
92		C544-5	北大Ⅱ～Ⅲ	土坑(4PT31)	田中編(2012)	炭化材	1490 ± 30	IAAA-102236
93	西島松 5	16485NM5-8	北大Ⅲ	土壙墓(P3)	和泉田編(2002)	木片 (ヤマゲワ属)	1310 ± 40	Beta-150482
94	青苗砂丘	19890AS-1	十和田	住居跡 H-1(北トレン チ礫周囲床面)	皆川編(2002)	炭化材	1770 ± 40	Beta-164480
95		19891AS-2	十和田	住居跡 H-1(南トレン チ貼床面出土)	皆川編(2002), 図 19-17	土器附着炭化物 (胴部外面)	2210 ± 40	Beta-164481
96		19892AS-3	十和田～刻文	貝塚(E14-N13)	皆川編(2002)	炭化材	1780 ± 40	Beta-164482
97		21667AS-4	刻文	住居跡 H-2, 炉跡出 土	越田編(2003)	炭化植物遺体 (クルミ内果皮)	1580 ± 40	Beta-174461
98		21668AS-5	刻文	住居跡 H-3, 炉跡出 土	越田編(2003)	炭化材	1590 ± 40	Beta-174462
99	利尻富士町 役場	35427 RY09B2SK01	十和田	1号墓	山谷編(2011)	炭化材	2190 ± 60	Beta-270276
100		36151rishiri	十和田	1号墓	山谷編(2011), 図 35-1	土器附着炭化物 (底部)	2220 ± 40	Beta-275840
101		35429RY09SI03	十和田	3号住居	山谷編(2011), サンプル 4	炭化材	2010 ± 60	Beta-270278
102		35430RY09SI02	刻文	2号住居	山谷編(2011)	炭化材	1490 ± 40	Beta-270279
103		35431RY09SI01	刻文～沈線文	1号住居	山谷編(2011), サンプル 4	炭化材	1460 ± 60	Beta-270280
104		USRF-1	刻文～沈線文	1号住居(RYB 地点 トレンチ)	臼杵編(2008)	炭化材	1450 ± 30	IAAA-71640
105	川尻北 チャシ	USKES-11	十和田	2号竪穴住居址	臼杵編(2007)  大場ほか(1972), 第 14 図 -1	土器附着炭化物 (口縁部外面)  ( $\delta^{13}\text{C}$ 値:-25.1 ‰, $\delta^{15}\text{N}$ 値:11.1 ‰,C/N 比:41.1)	2020 ± 30	IAAA-52385
106		USKES-12	十和田	2号竪穴住居址	臼杵編(2007)  大場ほか(1972), 第 14 図 -1	土器附着炭化物 (口縁部内面)  ( $\delta^{13}\text{C}$ 値:-23.3 ‰, $\delta^{15}\text{N}$ 値:14.3 ‰,C/N 比:10.0)	2180 ± 30	IAAA-52386
107	ホロベツ砂 丘?	USKES-1	刻文	採集品	臼杵編(2007)	土器附着炭化物 (頸部外面)  ( $\delta^{13}\text{C}$ 値:-25.2 ‰, $\delta^{15}\text{N}$ 値: 9.3‰,C/N 比: 45.0)	2080 ± 30	IAAA-52376
108		USKES-2	刻文	採集品	臼杵編(2007)	土器附着炭化物 (口縁部内面)  ( $\delta^{13}\text{C}$ 値:-23.6 ‰, $\delta^{15}\text{N}$ 値: 12.2‰,C/N 比: 15.3)	2040 ± 30	IAAA-52377
109	モヨロ貝塚	USMOY-1	刻文	9号竪穴, 床面	米村・梅田編 (2009)	土器附着炭化物 (口縁部内面)  ( $\delta^{13}\text{C}$ 値:-22.5 ‰, $\delta^{15}\text{N}$ 値:17.6 ‰,C/N 比:7.0)	2000 ± 40	IAAA-41928

表 3-1-5 北海道における鈴谷式前後の<sup>14</sup>C年代値

No.	遺跡名	試料番号	土器型式	出土遺構	引用文献, 図版番号ほか	試料種類	<sup>14</sup> C年代 (BP)	Lab.No.
110		USMOY-2	刻文	9号竪穴, 床面	米村・梅田編 (2009)	土器附着炭化物 (頸部外面) ( $\delta^{13}\text{C}$ 値:-24.6 ‰, $\delta^{15}\text{N}$ 値: 17.9‰,C/N比: 10.0)	1920 ± 40	IAAA-41929
111		USMOY-3	刻文	9号竪穴, 床下層	米村・梅田編 (2009)	炭化材(柱材)	1510 ± 30	IAAA-52387
112		USMOY-4	刻文	9号竪穴, 骨塚2	米村・梅田編 (2009)	炭化種子(オオム ギ類果)	1480 ± 40	IAAA-41930
113		USMOY-5	刻文	9号竪穴, 北壁	米村・梅田編 (2009)	オニグルミ堅果 皮片	1600 ± 30	IAAA-52388
114		USMOY-6	刻文	9号竪穴, 骨塚2	米村・梅田編 (2009)	炭化種子(ブドウ 属種子)	1470 ± 40	IAAA-41931
115		USMOY-7	刻文	9号竪穴, c/d区	米村・梅田編 (2009)	オニグルミ堅果 皮片	1510 ± 30	IAAA-52389
116		USMOY-8	刻文	9号竪穴, c区	米村・梅田編 (2009)	オニグルミ堅果 皮片	1550 ± 30	IAAA-52390
117		USMOY-9	刻文	9号竪穴, 床面	米村・梅田編 (2009)	オニグルミ堅果 皮片	1470 ± 30	IAAA-52391
118		USMOY-10	刻文	9号竪穴, 床面	米村・梅田編 (2009)	オニグルミ堅果 皮片	1530 ± 30	IAAA-52392
119		USMOY-11	刻文	9号竪穴, 床面獣骨 集積	米村・梅田編 (2009)	オニグルミ堅果 皮片	1380 ± 30	IAAA-52393
120		USMOY-12	刻文	9号竪穴, 骨塚14	米村・梅田編 (2009)	草本茎 ( $\delta^{13}\text{C}$ 値:-26.7 ‰, $\delta^{15}\text{N}$ 値: 23.1‰,C/N比: 23.1)	1520 ± 30	IAAA-52394
121		USMOY-13	刻文	9号竪穴, 骨塚2	米村・梅田編 (2009)	枝材	1400 ± 30	IAAA-52395
122	ウトロ	No.2(2006年度)	刻文	竪穴住居(PIT81), 炉跡	松田編(2011)	炭化材	1440 ± 40	Beta-227078
123		No.13(2008年度)	刻文	竪穴住居(PIT113), No.971	松田編(2011)	炭化物	1500 ± 40	Beta-255211
124		No.14(2008年度)	刻文	竪穴住居(PIT113), No.959	松田編(2011)	炭化物	1420 ± 40	Beta-255212
125		No.1(2009年度)	刻文	竪穴住居(PIT113), 床面直上	松田編(2011)	炭化物	1480 ± 40	Beta-265434
126		No.15(2008年度)	刻文	竪穴住居(PIT183), No.23	松田編(2011)	炭化物	1520 ± 40	Beta-255213
127		No.21(2008年度)	刻文	竪穴住居(PIT183), No.715	松田編(2011)	炭化物	1470 ± 40	Beta-255219
128		No.2(2009年度)	刻文	竪穴住居(PIT183), No.67	松田編(2011)	炭化物	1640 ± 40	Beta-265435
129		No.16(2008年度)	刻文	竪穴住居(PIT40), HP25No.4976	松田編(2011)	炭化物	1380 ± 40	Beta-255214
130		No.17(2008年度)	刻文	竪穴住居(PIT108), No.1110	松田編(2011)	炭化物	1480 ± 40	Beta-255215
131		No.18(2008年度)	刻文	竪穴住居(PIT108), No.8467	松田編(2011)	炭化物	1640 ± 40	Beta-255216
132		No.2(2008年度)	刻文	土坑墓(PIT29), 735	松田編(2011)	炭化物	1620 ± 40	Beta-255200

表 3-2 サハリンにおける新石器時代後期～鈴谷式の <sup>14</sup>C 年代値

No.	遺跡名	時期・土器型式	出土遺構	引用文献, 図版番号ほか	試料種類	<sup>14</sup> C 年代 (BP)	Lab.No.
1	ナビリ 1	イムチン		Василевский и др (2004)	炭化物	2495 ± 40	SOAN-3817
2	イムチン 2	イムチン	第 20 号住居	Василевский и др (2004)	炭化物	2570 ± 110	MAG-672
3		イムチン	第 20 号住居外	Василевский и др (2004)	炭化物	2640 ± 100	MAG-670
4	セベロ・サハリン スク 1	イムチン	1991 年調査, 第 1 発掘 区, 住居, 櫛歯文土器	Василевский и др (2004)	土器付着炭化物	2700 ± 35	SOAN-3719
5	ブレドレフリヤン カ	アニワ B	第 1 号住居, 縄線文と 「突瘤文」を伴う土器	ワシレフスキー (2003)	土器付着炭化物	2800 ± 45	AA-23131
6		アニワ D	第 1 号住居, 縄線文と 「突瘤文」を伴う土器	ワシレフスキー (2003)	土器付着炭化物	2740 ± 45	AA-25440
7	ユージナヤ 2	アニワ	第 1 号住居	ワシレフスキー (2003)	炭化物	2360 ± 110	LE-4040
8		アニワ	第 1 号住居	ワシレフスキー (2003)	炭化物	2320 ± 160	LE-4039
9		アニワ	第 1 号住居	ワシレフスキー (2003)	炭化物	2550 ± 160	LE-4038
10		アニワ	第 1 号住居	ワシレフスキー (2003)	炭化物	2450 ± 100	LE-4041
11	カシカレバグシ 5	カシカレバグシ (後期段階)	第 1 号住居(架溝部材 の焼け跡)	グリシェンコ(2015)	炭化物	2705 ± 75	SOAN-7526
12		カシカレバグシ (後期段階)	第 1 号住居(床面・埋 葬遺構・人頭骨付近)	グリシェンコ(2015)	炭化物	2385 ± 55	SOAN-7527
13		カシカレバグシ (後期段階)	第 1 号住居(炉)	グリシェンコ(2015)	炭化物	2340 ± 45	SOAN-7528
14		カシカレバグシ (後期段階)	第 1 号住居(埋葬遺構 覆土・炭化物のレンズ 状堆積)	グリシェンコ(2015)	炭化物	2330 ± 70	SOAN-7529
15		カシカレバグシ (後期段階)	第 1 号住居(床面・炭 化物のひろがり)	グリシェンコ(2015)	炭化物	2680 ± 40	SOAN-7530
16		カシカレバグシ (前期段階)	第 3 号住居(炉)	グリシェンコ(2015)	炭化物	2750 ± 65	SOAN-7531
17		カシカレバグシ (前期段階)	第 6 号住居(炉)	グリシェンコ(2015)	炭化物	2845 ± 60	SOAN-7532
18		カシカレバグシ (前期段階)	第 6 号住居 (壁際覆土・炭化物)	グリシェンコ(2015)	炭化物	2895 ± 85	SOAN-7533
19	スタロドゥフスコ エ 3	続縄文	99 号と 100 号住居の 間の炉	ワシレフスキー (2003)	土器付着炭化物	2265 ± 30	AA-20865
20	アド・ティモボ 7	古金属器	1996 年発掘区, 基盤層	Василевский и др (2004)	炭化物	2030 ± 30	SOAN-3637
21	(ブラゴダトヌイ 1)	古金属器	1996 年発掘区, 基盤層	Василевский и др (2004)	炭化物	2110 ± 40	SOAN-3718
22		古金属器	1996 年発掘区	Василевский и др (2004)	貝殻	2690 ± 45	SOAN-3718
23				Kuzmin et al.(2004)	炭化物	1715 ± 30	AA-36395
24				Kuzmin et al.(2004)	炭化物	1700 ± 35	AA-36394
25	アド・ティモボ 3 (ブジ岩陰)	古金属器	1997 年発掘区	Василевский и др (2004)	炭化物	1540 ± 50	SOAN-3814
26	アド・ティモボ 4 (旧墓地)	古金属器	1997 年発掘区	Василевский и др (2004)	炭化物	2160 ± 125	SOAN-3821
27	ベロエ 1	古金属器		Василевский и др (2004)	炭化物	2200 ± 35	AA-37077
28	アド・ティモボ 1	北サハリン (ナビリ)		Василевский и др (2004)	炭化物	2220 ± 35	AA-36440

表3-2-2 サハリンにおける新石器時代後期～鈴谷式の<sup>14</sup>C年代値

No.	遺跡名	時期・土器型式	出土遺構	引用文献, 図版番号ほか	試料種類	<sup>14</sup> C年代 (BP)	Lab.No.
29		北サハリン (ナビリ)		Василевский и др (2004)	炭化物	2105 ± 100	SOAN-4280
30				Kuzmin et al.(2004)	炭化物	1905 ± 100	SOAN-3723
31	アド・ティモボ 20	北サハリン (ナビリ)	1997年発掘区, 住居	Василевский и др (2004)	炭化物	2495 ± 30	SOAN-3822
32		北サハリン (ナビリ)	1997年発掘区, 住居	Василевский и др (2004)	炭化物	2610 ± 165	SOAN-3823
33				Kuzmin et al.(2004)	炭化物	2200 ± 35	AA-36438
34	チャイボ 1	ナビリ	2004年調査, 第2発掘区, 187号住居, 炉址	ワシレフスキーほか (2009)	炭化物	2490 ± 40	SOAN-5820
35		ピリトゥン	2004年調査, 第2発掘区, 188号住居, 炉址	ワシレフスキーほか (2009)	炭化物	2440 ± 65	SOAN-5821
36	チャイボ 6	(ナビリ)	第1地点, 第1号住居, 第1号炉址	Василевский (2008)	炭化物	2400 ± 55	SOAN-5829
37		(ナビリ)	第1地点, 第25号ピット埋土(第1号住居に付属)	Василевский (2008)	炭化物	2480 ± 45	SOAN-5828
38			第2地点, 第3号住居(架構部材の焼け跡)	Василевский (2008)	炭化物	2160 ± 55	SOAN-5831
39	ジムダン 5	(ナビリ)	第2号住居, 炉	Василевский (2008)	炭化物	2005 ± 55	SOAN-5818
40		(ナビリ)	第1号住居, 炉	Василевский (2008)	炭化物	2815 ± 50	SOAN-5817
41	ウシュ 2	北サハリン (ナビリ)		Василевский и др (2004)	炭化物	2170 ± 60	SOAN-3562
42	パウリ 2	北サハリン (ナビリ)		Василевский и др (2004)	木炭	1720 ± 85	SOAN-3415
43	ノクシ 2	北サハリン (ナビリ)		野村(1996)	木炭	2870 ± 90	NU-431
44	スターリイ・ナビリ 1	北サハリン (ナビリ)		Василевский и др (2004)	炭化物	1450 ± 45	SOAN-3815
45	レベヂヌイ 1	ナビリ	2007年調査, 第2発掘区, 51地点, 住居内炉址	ワシレフスキーほか (2009)	炭化物	2395 ± 65	SOAN-7100
46		ピリトゥン	2007年調査, 第2発掘区, 51地点炭化・被熱したレンズ状堆積とその上の盛土	ワシレフスキーほか (2009)	炭化物	2030 ± 70	SOAN-7097
47		ピリトゥン	2007年調査, 第2発掘区, 48号住居, 炉址	ワシレフスキーほか (2009)	炭化物	2190 ± 55	SOAN-7093
48	カシカレバグシ 2	(ピリトゥン)	第2発掘区, 第31-32号住居	Василевский (2008)	炭化物	2110 ± 40	SOAN-5825
49		(ピリトゥン)	第2発掘区, 第31-32号住居	Василевский (2008)	炭化物	2180 ± 35	SOAN-5827
50		(ピリトゥン)	第2発掘区, 第31-32号住居	Василевский (2008)	炭化物	2250 ± 60	SOAN-5823
51		(ピリトゥン)	第4発掘区, 第34号住居	Василевский (2008)	炭化物	2110 ± 45	SOAN-5826
52	ウスチアインスコエ	鈴谷(恵須取)	1993年調査	ワシレフスキー (2003)	土器付着炭化物	2540 ± 45	AA-36621
53		鈴谷	1993年調査, 住居の炉	ワシレフスキー (2003)	炭化物	2550 ± 110	Beta-110665
54		鈴谷以降	砂丘へ人が来てから形成された黒色土層	ワシレフスキー (2003)	炭化物	2340 ± 60	Beta-110666
55	ベロカメンナヤ	鈴谷(櫛歯文)	1992年調査, 第1発掘区, 第5号住居	Василевский и др (2004)	土器付着炭化物	2300 ± 50	AA-36737

表 3-2-3 サハラにおける新石器時代後期～鈴谷式の <sup>14</sup>C 年代値

No.	遺跡名	時期・土器型式	出土遺構	引用文献, 図版番号ほか	試料種類	<sup>14</sup> C 年代 (BP)	Lab.No.
56		鈴谷(楕円形スタンブ文)	1993年調査,第2発掘区,第1号住居周辺	Василевский и др (2004)	土器付着炭化物	2420 ± 35	AA-36735
57		鈴谷(楕円文)	1994年調査,第4発掘区,第7号住居	Василевский и др (2004)	土器付着炭化物	2460 ± 35	AA-36736
58		鈴谷(楕円文)	1998年調査,第6発掘区,土壘頂部	Василевский и др (2004)	土器付着炭化物	2520 ± 35	AA-36734
59	ススヤ I	鈴谷	発掘区	ワシレフスキー (2003)	炭化物	2520 ± 35	SOAN-782
60		鈴谷	発掘区	ワシレフスキー (2003)	炭化物	2040 ± 65	SOAN-783
61		鈴谷	発掘区	ワシレフスキー (2003)	炭化物	1850 ± 150	SOAN-1025
62	ボレチエ I	鈴谷		Василевский и др (2004)	炭化物	2365 ± 35	AA-37076
63		鈴谷		Василевский и др (2004)	炭化物	2315 ± 35	AA-37225
64		鈴谷		Василевский и др (2004)	炭化物	2180 ± 35	AA-37124
65	アジョールスク I	鈴谷	第15号住居	ワシレフスキー (2003)	炭化物	1600 ± 100	MAG-678
66		鈴谷	第15号住居	ワシレフスキー (2003)	炭化物	1590 ± 200	MAG-669
67		鈴谷	第15号住居	ワシレフスキー (2003)	炭化物	1750 ± 100	MAG-676
68		鈴谷	第15号住居	ワシレフスキー (2003)	炭化物	2070 ± 100	MAG-677
69		鈴谷		ワシレフスキー (2003)	炭化物	1920 ± 55	SOAN-1019
70		鈴谷		ワシレフスキー (2003)	炭化物	1910 ± 65	SOAN-1018
71		鈴谷		Kuzmin et al.(2004)	土器付着炭化物	2360 ± 35	AA-37363
72	クズネツォーボ I	鈴谷	2層, 炉	ワシレフスキー (2003)	炭化物	1640 ± 340	DVGU-90
73		鈴谷	2層, 炉	ワシレフスキー (2003)	炭化物	2384 ± 270	DVGU-91
74		鈴谷	2層, 炉	ワシレフスキー (2003)	炭化物	2750 ± 150	MAG-693
75	タラナイ I	鈴谷	試掘孔	ワシレフスキー (2003)	炭化物	1970 ± 45	SOAN-1022
76		鈴谷	試掘孔	ワシレフスキー (2003)	炭化物	2050 ± 30	SOAN-1021
77		鈴谷	試掘孔	ワシレフスキー (2003)	炭化物	2155 ± 65	SOAN-1023
78	スタロドゥフスコエ 2	鈴谷	第2号住居	Василевский и др (2004)	炭化物	1540 ± 30	SOAN-1143
79	クルーグリュミス	鈴谷	試掘孔	ワシレフスキー (2003)	炭化物	1700 ± 100	MAG-675
80	シャフタリスク I	鈴谷	露頭	ワシレフスキー (2003)	木材	1780 ± 60	SOAN-1024
81	プガチヨボ 9	鈴谷		Василевский и др (2004)	炭化物	2315 ± 55	SOAN-3264
82	プガチヨボ 38	鈴谷		Василевский и др (2004)	炭化物	1890 ± 55	SOAN-3565
83	タギユ	鈴谷		Василевский и др (2004)	炭化物	2265 ± 35	AA-37227
84	スヴォボードノエ I	鈴谷	試掘孔	Василевский и др (2004)	炭化物	2700 ± 200	MAG-692
85	イワノフカ	アニワ～鈴谷	第1発掘区	Василевский и др (2004)	木柱	1850 ± 90	TIG-270

表4 常呂川河口遺跡、利尻富士町役場遺跡、多蘭泊出土試料の<sup>14</sup>C年代値

No.	遺跡名	試料番号	土器型式	出土遺構, 引用文献, 図版番号ほか	試料種類	<sup>14</sup> C年代 (BP)	Lab.No.
1	常呂川河口	TK73-F14	鈴谷	57号竪穴・床面直上, 武田編(2002), 第60図-4	土器附着炭化物(口縁部内面)	2530 ± 40	MTC-17469
2		TK73-F39	後北 C <sub>1</sub>	ピット 22(墓)・埋土, 武田編(1996), 第246図-10	土器附着炭化物(口縁～胴部上半内面)	2020 ± 45	MTC-17477
3		TK73-F40	後北 C <sub>2</sub> ・D (I期)	ピット 253・埋土, 武田編(1996), 第392図-6	土器附着炭化物(口縁～胴部上半内面)	2515 ± 40	MTC-17478
4		TK73-F31	後北 C <sub>2</sub> ・D (I期)	69号竪穴・床面, 武田編(2002), 第125図-1	土器附着炭化物(口縁部内面)	2500 ± 40	MTC-17471
5		TK73-F29	後北 C <sub>2</sub> ・D (II期)	69号竪穴・埋土, 武田編(2002), 第127図-1	土器附着炭化物(口縁部内面)	2530 ± 45	MTC-17470
6		TK73-F34	後北 C <sub>2</sub> ・D (II期)	158号竪穴・埋土, 武田編(2006), 第149図-1	土器附着炭化物(胴部上半内面)	2290 ± 40	MTC-17474
7		TK73-F41	後北 C <sub>2</sub> ・D (II期)	第I・II層, 武田編(2000), 図版 10-2	土器附着炭化物(口縁～胴部上半内面)	2240 ± 40	MTC-17479
8		TK73-F33	後北 C <sub>2</sub> ・D (II期)	100号竪穴・埋土, 武田編(2004), 第110図-1	土器附着炭化物(胴部上半内面)	1975 ± 45	MTC-17473
9		TK73-F43	後北 C <sub>2</sub> ・D (II期)	第I・II層, 武田編(2000), 第50図-1	土器附着炭化物(口縁～胴部上半内面)	1815 ± 40	MTC-17480
10		TK73-F32	後北 C <sub>2</sub> ・D (III期)	100号竪穴・埋土, 武田編(2004), 第110図-2	土器附着炭化物(口縁部内面)	2275 ± 40	MTC-17472
11		TK73-F38	後北 C <sub>2</sub> ・D (III期)	第I・II層, 武田編(2000), 第44図-7	土器附着炭化物(口縁部内面)	1900 ± 40	MTC-17476
12		TK73-F36	北大 I	第I・II層, 武田編(2000), 第44図-1	土器附着炭化物(口縁部内面)	2070 ± 45	MTC-17475
13		TK73-148aH	後北 C <sub>1</sub> もしくは 後北 C <sub>2</sub> ・D	148a号竪穴・炉2(99-10), 武田編(2006)	炭化植物遺体 (クルミ内果皮)	1985 ± 45	MTC-17484
14		TK73-57H	後北 C <sub>2</sub> ・D もしくは 鈴谷	57号竪穴・床面(93-21), 武田編(2002)	木炭	1760 ± 45	MTC-17481
15		TK73-69H	後北 C <sub>2</sub> ・D	69号竪穴(94-26⑤), 武田編(2002)	木炭	1695 ± 40	MTC-17482
16		TK73-83aH	後北 C <sub>2</sub> ・D	83a号竪穴・埋土の炉1(95-21), 武田編(2004)	炭化植物遺体 (クルミ内果皮)	1625 ± 40	MTC-17483
17	利尻富士町 役場	RFY-2	鈴谷	包含層, 山谷編(2011), 図 86-486	土器附着炭化物 (口縁部内面)	2590 ± 45	MTC-17486
18		RFY-9	鈴谷	4号住居(3号住居の北端から出土) 山谷編(2011), 図 33-24	土器附着炭化物(口縁～胴部上半内面)	2340 ± 45	MTC-17493
19		RFY-1	鈴谷	包含層, 山谷編(2011), 図 91-613	土器附着炭化物 (口縁部内面)	2280 ± 45	MTC-17485
20		RFY-3	後北 C <sub>1</sub>	包含層, 山谷編(2011), 図 94-662	土器附着炭化物(口縁～胴部上半内面)	2480 ± 40	MTC-17487
21		RFY-6	十和田	3号住居・覆土, 山谷編(2011), 図 26-11	土器附着炭化物 (口縁部内面)	2120 ± 45	MTC-17490
22		RFY-5	十和田	3号住居・床面よりやや浮いた地点 山谷編(2011), 図 25-9	土器附着炭化物 (口縁部内面)	2100 ± 40	MTC-17489
23		RFY-4	十和田	3号住居・床面, 山谷編(2011), 図 25-1	土器附着炭化物(口縁～胴部上半内面)	2045 ± 40	MTC-17488
24		RFY-8	刻文	包含層, 山谷編(2011), 図 72-187	土器附着炭化物 (口縁部内面)	2200 ± 45	MTC-17492
25		RFY-7	刻文	包含層, 山谷編(2011), 図 69-133	土器附着炭化物 (口縁部内面)	2160 ± 40	MTC-17491
26		RFY-12	鈴谷?	4号住居, 山谷編(2011)	樹皮	230 ± 45	MTC-17496
27		RFY-11	十和田	3号住居・サンプル7, 山谷編(2011)	木炭	1970 ± 40	MTC-17495
28		RFY-10	刻文	2号住居, 山谷編(2011)	木炭	1405 ± 40	MTC-17494
29	サハリン・ 多蘭泊	SUSU-U	鈴谷	図 2	土器附着炭化物 (口縁部内面)	2255 ± 45	MTC-17467
30		SUSU-S	鈴谷	上段と同一個体	土器附着炭化物 (胴部上半外面)	2140 ± 45	MTC-17468

表5 測定試料の暦年較正年代値、炭素・窒素同位体比、C/N比

No.	試料番号	<sup>14</sup> C年代 (BP)	暦年較正年代値 (calBC/calAD, 1σ)	δ <sup>13</sup> C (‰)	δ <sup>15</sup> N (‰)	C (%)	N (%)	C/N
1	TK73-F14	2530 ± 40	793-748 (24.2%), 685-667 (9.1%) 642-587 (25.0%), 581-556 (9.9%)	-21.7	13.7	57.8	5.8	11.7
2	TK73-F39	2020 ± 45	89-76 (5.6%), 57-29 (57.7%) 39-50 (4.9%)	-27.0	6.4	60.9	6.3	11.3
3	TK73-F40	2515 ± 40	778-741 (16.3%), 687-664 (10.3%) 646-550 (41.6%)	-23.4	14.5	64.3	4.8	15.7
4	TK73-F31	2500 ± 40	771-732 (14.7%), 691-660 (11.6%) 650-544 (41.8%)	-23.0	14.4	60.2	6.1	11.5
5	TK73-F29	2530 ± 45	792-747 (22.3%), 685-666 (9.0%) 642-555 (36.9%)	-21.8	14.1	62.3	7.4	9.8
6	TK73-F34	2290 ± 40	402-357 (48.8%), 282-257 (15.7%) 243-236 (3.6%)	-20.9	14.7	60.8	8.1	8.7
7	TK73-F41	2240 ± 40	380-351 (16.5%), 300-210 (51.7%)	-22.7	11.3	54.6	7.4	8.6
8	TK73-F33	1975 ± 45	37-30 (3.9%), 21-11 (6.6%) 2-70 (57.7%)	-25.9	7.4	55.4	9.4	6.9
9	TK73-F43	1815 ± 40	134-241 (68.2%)	-27.5	5.8	58.7	7.2	9.5
10	TK73-F32	2275 ± 40	398-356 (37.2%), 286-235 (31.0%)	-21.9	12.9	50.6	6.2	9.6
11	TK73-F38	1900 ± 40	31-37 (2.2%), 51-139 (64.0%) 199-206 (2.1%)	-24.9	7.3	45.4	5.9	9.0
12	TK73-F36	2070 ± 45	165-41 (68.2%)	-23.9	12.1	54.7	6.3	10.1
13	TK73-148aH	1985 ± 45	39-61 (68.2%)	-26.0				
14	TK73-57H	1760 ± 45	220-345 (68.2%)	-27.4				
15	TK73-69H	1695 ± 40	260-279 (11.0%), 326-402 (57.2%)	-26.7				
16	TK73-83aH	1625 ± 40	384-434 (37.2%), 456-469 (5.4%) 488-534 (25.5%)	-26.1				
17	RFY-2	2590 ± 45	816-756 (63.6%), 679-671 (3.0%) 604-599 (1.7%)	-24.0	14.9	58.5	6.4	10.6
18	RFY-9	2340 ± 45	485-367 (68.2%)	-21.8	16.8	59.7	8.1	8.6
19	RFY-1	2280 ± 45	400-357 (41.1%), 285-235 (27.1%)	-23.7	14.4	61.9	6.3	11.5
20	RFY-3	2480 ± 40	757-703 (17.9%), 696-679 (5.7%) 672-541 (44.7%)	-22.9	14.3	58.8	5.8	11.9
21	RFY-6	2120 ± 45	200-88 (60.1%), 76-57 (8.1%)	-24.2	14.5	63.5	4.5	16.3
22	RFY-5	2100 ± 40	175-86 (54.8%), 80-55 (13.4%)	-23.1	15.4	55.5	5.8	11.2
23	RFY-4	2045 ± 40	148-142 (2.3%), 112-5 (65.9%)	-25.4	11.7	63.1	4.4	16.8
24	RFY-8	2200 ± 45	358-281 (40.9%), 257-203 (27.3%)	-21.2	17.4	58.1	7.1	9.6
25	RFY-7	2160 ± 40	354-291 (30.6%), 232-161 (33.6%) 131-119 (4.0%)	-23.4	15.3	64.1	4.1	18.3
26	RFY-12	230 ± 45	1640-1681 (30.3%), 1739-1748 (2.4%) 1762-1803 (25.8%), 1937- (9.7%)	-28.1				
27	RFY-11	1970 ± 40	21-11 (5.8%), 2-73 (62.4%)	-26.1				
28	RFY-10	1405 ± 40	608-660 (68.2%)	-27.5				
29	SUSU-U	2255 ± 45	391-352 (24.2%), 296-229 (39.8%) 221-212 (4.2%)	-22.5	15.5	61.5	6.8	10.5
30	SUSU-S	2140 ± 45	350-311 (14.9%), 209-92 (53.3%)	-24.8	14.7	63.4	3.4	21.7

表6 測定試料の化学処理収率

No.	試料番号	使用量 (mg)	AAA 処理後 (mg)	回収率 (%)	酸化量 (mg)	CO <sub>2</sub> 生成量 (mg)	CO <sub>2</sub> 収率 (%)	CO <sub>2</sub> 使用量 (mg)
1	TK73-F14	63.2	49.0	77.6	2.2	1.3	59.2	1.3
2	TK73-F39	105.7	71.5	67.7	2.4	1.4	56.0	1.4
3	TK73-F40	174.8	124.7	71.3	2.4	1.4	58.5	1.4
4	TK73-F31	69.8	47.8	68.6	2.7	1.5	57.9	1.5
5	TK73-F29	150.6	113.6	75.4	2.6	1.6	62.2	1.1
6	TK73-F34	148.1	108.5	73.2	2.3	1.2	53.4	1.2
7	TK73-F41	56.2	36.5	65.0	2.6	1.4	52.1	1.4
8	TK73-F33	104.1	72.1	69.3	2.7	1.5	54.7	1.5
9	TK73-F43	87.4	61.4	70.3	2.2	1.2	55.9	1.2
10	TK73-F32	184.1	125.9	68.4	2.9	1.5	51.6	1.5
11	TK73-F38	50.5	33.0	65.4	2.5	1.1	43.9	1.1
12	TK73-F36	182.0	116.1	63.8	2.5	1.3	53.2	1.3
13	TK73-148aH	45.6	29.2	64.2	2.2	1.3	59.5	1.3
14	TK73-57H	25.8	18.9	73.2	2.3	1.4	60.9	1.4
15	TK73-69H	55.6	36.5	65.6	2.2	1.3	60.1	1.3
16	TK73-83aH	61.9	47.6	76.9	2.1	1.4	64.8	1.4
17	RFY-2	67.4	47.4	70.4	2.1	1.2	55.5	1.2
18	RFY-9	158.5	100.6	63.4	2.5	1.4	54.8	1.4
19	RFY-1	55.9	37.6	67.2	2.2	1.3	61.3	1.3
20	RFY-3	94.7	70.8	74.7	2.3	1.3	57.8	1.3
21	RFY-6	142.3	93.5	65.7	2.3	1.4	61.8	1.4
22	RFY-5	73.6	51.3	69.7	2.2	1.1	49.1	1.1
23	RFY-4	152.0	98.2	64.6	2.2	1.3	61.3	1.3
24	RFY-8	304.5	203.7	66.9	2.3	1.2	54.4	1.2
25	RFY-7	187.1	143.3	76.6	2.2	1.4	64.4	1.4
26	RFY-12	23.3	17.1	73.4	2.1	1.4	66.0	1.4
27	RFY-11	42.3	24.9	58.8	2.2	1.3	61.1	1.3
28	RFY-10	43.9	31.9	72.5	2.3	1.5	65.5	1.5
29	SUSU-U	77.0	53.7	69.7	2.3	1.3	58.1	1.3
30	SUSU-S	72.6	48.1	66.3	2.3	1.5	62.2	1.5

引用文献

- 秋山洋司編 二〇〇七「K518 遺跡第一次調査」札幌市文化財調査報告書八四、札幌市教育委員会
- 天方博章編 二〇一〇「オニキシベニ遺跡」北海道厚真町教育委員会
- 石井 淳編 二〇〇二「K39 遺跡第九次調査」札幌市文化財調査報告書六九、札幌市教育委員会
- 石井 淳編 二〇〇四「K514 遺跡」札幌市文化財調査報告書七三、札幌市教育委員会
- 石田 収蔵 一九〇六 飯島教授の樺太みやげ、東京人類学会雑誌二四五・四三四―四三六
- 出穂雅美編 二〇〇五「K135 遺跡第四次調査」札幌市文化財調査報告書七八、札幌市教育委員会
- 泉 靖一・曾野寿彦編 一九六七「オンコロマナイ」東京大学出版会
- 和泉田毅編 二〇〇二「西島松五遺跡第二分冊」北海道埋蔵文化財センター調査報告書第一七八集、北海道埋蔵文化財センター
- 伊東 信雄 一九四二 樺太先史時代土器編年試論喜田貞吉博士追悼記念国史論集（東北大学国史学会、編）、一九四四、東京大東書館
- 白杵 勲・國木田大 二〇一四 北海道における縄文時代年代研究と貝塚の年代測定、「日本考古学協会二〇一四年度伊達大会研究発表資料集」、二三三―二四〇、日本考古学協会二〇一四年度伊達大会実行委員会
- 白杵 勲編 二〇〇五「北海道における古代から近世の遺跡の暦年代」札幌学院大学
- 白杵 勲編 二〇〇七「北海道における古代から近世の遺跡の暦年代」札幌学院大学
- 白杵 勲編 二〇〇八「統縄文化・擦文文化の暦年代研究」札幌学院大学
- 宇田川 洋 一九八二 道東の統縄文土器「縄文土器大成五 統縄文」(加藤晋平・澤四郎、編)、二四―二六、講談社
- 内山真澄編 一九九五「遺跡発掘調査報告書 利尻富士町役場」利尻富士町教育委員会
- 大澤正吾・シェフコムード・福田正宏・大貫静夫・熊木俊朗・國木田大・佐藤宏之・尾田識好・夏木大吾・ゴルシュコフ・ボチカリヨバ・内田和典・森先一貴
- 二〇一三 ウデイリ湖遺跡群の考古学的調査(二〇一二年度)、「第一四回北アジア調査研究報告会発表要旨」(金沢学院大学文学部歴史文化学科 小嶋研究室、編)、五一―八、北アジア調査研究報告会実行委員会
- 大場利夫・新岡武彦・大井晴男・菊池俊彦 一九七二「枝幸町尻チャシ調査概報」北海道枝幸町教育委員会
- 小田寛貴・本庄かや子・シェフコムード・熊木俊朗・白杵勲・福田正宏 二〇〇五 アムール川下流域の遺跡から出土した土器の<sup>14</sup>C年代測定、「間宮海峡先史文化の復元と日本列島への文化的影響」(熊木俊朗・福田正宏、編)、一五一―一五八、東京大学大学院人文社会系研究科附属北海道文化研究常呂実習施設・ハバロフスク州郷土誌博物館
- 小野裕子・天野哲也 二〇〇二「鈴谷文化」の形成過程 [Okhotsk culture formation, metamorphosis and ending] (Edited by Amano, T. Vasilevski, A.) 一〇七―一四、北海道大学総合博物館
- 小野裕子・天野哲也 二〇〇八 オホーツク文化の形成と展開に関わる集団の文化的系統について、「エミシ・エゾ・アイヌ」(榎森進・小口雅史・澤登寛聡、編)、一三九―一九二、岩田書院
- 大場 利夫 一九六七 北海道周辺にみられるオホーツク文化―I 樺太―、北方文化研究二・一―二六
- 柏木大延編 二〇〇九「K518 遺跡第二次調査」札幌市文化財調査報告書八八、札幌市教育委員会
- 樺太庁編 一九〇八「樺太要覧」隆文館
- 樺太庁拓殖部編 一九二三「樺太之産業」樺太庁
- 樺太民政署 一九〇七「南部樺太植民地選定調査書」樺太民政署
- 木山 克彦 二〇〇五 ウスチ・アイヌスコエ遺跡出土の鈴谷式土器、「海と考古学」(海交史研究会考古学論集刊行会、編)、七一―一四、六一書房
- 木山 克彦 二〇一〇 紀元前後七世紀における極東・サハリン・北海道北部の考古学的様相、「新しいアイヌ史の構築」(加藤博文・鈴木健治、編)、三八―四九、北海道大学アイヌ・先住民研究センター
- 木山克彦・シェフコムード、I. Y. A. コシツィナ、F. S 二〇〇三 パリシヤヤ・プフター遺跡出土の土器が提起するもの、古代文化五五―一―二〇―三二
- 清野 謙次 一九二五「一九八五」「日本原人之研究」岡書院、「増補版 日本原人の研究」第一書房
- 菊池 俊彦 二〇一〇 サハリン北部のナビリ文化とピリトゥン文化、北方島文化研究一〇・一五三―一六六
- 國木田 大 二〇一〇 北海道における縄文時代年代研究の現状と課題、「北海道考古学会二〇一〇年度研究大会要旨集 北海道の縄文文化研究の今」、三九―五〇、北海道考古学会
- 熊谷仁志・谷島由貴編 二〇〇六「森川三遺跡(二)」北海道埋蔵文化財センター調査報告書第二三四集、北海道埋蔵文化財センター
- 熊木 俊朗 一九九六 北海道北部の「鈴谷式土器」について、古代文化四八―五〇

- 熊木 俊朗 二〇〇一 後北C<sub>2</sub>・D式土器の展開と地域差―トコロチャシ跡遺跡出土土器の分析から・続縄文土器における文様割りつけ原理と文様単位  
(二)―「トコロチャシ跡遺跡」(宇田川洋・熊木俊朗、編)、一七六―二二七、東京大学大学院人文社会学系研究科
- 熊木 俊朗 二〇〇三 道東北部の続縄文文化「新北海道の古代」二 続縄文・オホーツク文化」(野村崇・宇田川洋、編)、五〇―六九、北海道出版企画センター
- 熊木 俊朗 二〇〇四 鈴谷式土器編年再論「アイヌ文化の成立」(宇田川洋先生華甲記念論文集刊行実行委員会、編)、一六七―一八九、北海道出版企画センター
- 熊木 俊朗 二〇一三 北海道東部の続縄文文化とサハリン・千島列島 Arctic Circle: 四一九
- グリシェンコ、V. A. (福田正宏訳) 二〇一五 続縄文文化の一部としての北サハリンのカシカレバグシ文化―紀元前一千年紀の極東島嶼世界における石器時代系統と古金属器時代系統の共存について―「日本列島北辺域における新石器/縄文文化のプロセスに関する考古学的研究―湧別市川遺跡の研究」(福田正宏、編)、一六九―一八四、東京大学大学院新領域創成科学研究科社会学文化環境学専攻・東京大学大学院人文社会学系研究科附属北海文化研究常呂実習施設
- 河野 広道 一九三三 樺太の旅(I) 人類学雑誌四八―三・一五八―一六三
- 越田賢一郎編 二〇〇三「奥尻町青苗砂丘遺跡」二 北海道埋蔵文化財センター重要遺跡確認調査報告書第三集、北海道埋蔵文化財センター
- 小杉 康・高倉 純・守屋豊人編 二〇〇六「北大構内の遺跡XIV」北海道大学埋蔵文化財調査室
- 小杉 康・高倉 純・守屋豊人・荒山千恵編 二〇一〇「北大構内の遺跡XVIII」北海道大学埋蔵文化財調査室
- 小杉 康・高倉 純・守屋豊人・坂口 隆・遠部 慎・本山志郎編 二〇一五「北大構内の遺跡XXI」北海道大学埋蔵文化財調査室
- 小針大志編 二〇一〇「K518遺跡第三次調査」札幌市文化財調査報告書九三、札幌市教育委員会
- 榊田朋広・熊木俊朗・福田正宏 二〇〇七 旭川市博物館所蔵サハリン州スタロドフスコエ遺跡出土土器について「極東ロシアにおける新石器時代から鉄器時代への移行過程に関する考古学的研究」(熊木俊朗・福田正宏、編)、一三―三八、東京大学大学院人文社会学系研究科附属北海文化研究常呂実習施設
- 坂本 稔 二〇〇七 炭素14年代による北海道・ロシア連邦出土遺物の較正年代の検討「北海道における古代から近世の遺跡の暦年代」(白杵 勲、編)、七―三一、札幌学院大学
- 下斗米秀二郎 一九〇六 南部樺太踏査 東京人類学会雑誌二四九・一〇四―一〇六
- 鈴木宏行編 二〇一四「幌内D遺跡」北海道埋蔵文化財センター調査報告書三〇八集、北海道埋蔵文化財センター
- 仙庭伸久編 二〇〇〇「K435遺跡第二次調査」札幌市文化財調査報告書六三、札幌市教育委員会
- 大坊 善章 一九二六 樺太本斗郡遺蹟 人類学雑誌四一―五・二五三―二五五
- 高橋 祐編 二〇一〇「C537遺跡」札幌市文化財調査報告書九六、札幌市教育委員会
- 武田 修編 一九九六「常呂川河口遺跡(一)」北海道常呂町教育委員会
- 武田 修編 二〇〇〇「常呂川河口遺跡(二)」北海道常呂町教育委員会
- 武田 修編 二〇〇二「常呂川河口遺跡(三)」北海道常呂町教育委員会
- 武田 修編 二〇〇四「常呂川河口遺跡(四)」北海道常呂町教育委員会
- 武田 修編 二〇〇六「常呂川河口遺跡(六)」北海道常呂町教育委員会
- 田中 亮編 二〇一〇「C544遺跡」札幌市文化財調査報告書九八、札幌市教育委員会
- 田中哲郎・藤井 浩編 二〇〇五「恵山貝塚II」北海道埋蔵文化財センター重要遺跡確認調査報告書第五集、北海道埋蔵文化財センター
- 谷島由貴・中山昭大・袖岡淳子・熊谷仁志編 二〇〇五「森川三遺跡」北海道埋蔵文化財センター調査報告書第二二集、北海道埋蔵文化財センター
- 坪井正五郎 一九〇五a 人類学的智識の要益々深し 東京人類学会雑誌二二二―三三四―三三九
- 坪井正五郎 一九〇五b 人類学的智識の要益々深し(承前) 東京人類学会雑誌二二二―四三三―四四三
- 坪井正五郎 一九〇五c 人類学的智識の要益々深し(承前完結) 東京人類学会雑誌二二三―四六二―四六八
- デリューギン、V. A. 一九九四 ハバロフスク地方における一九九〇―一九九三年の考古学的調査 北方ユーラシア学会会報四・一一二
- 東北大学考古学研究室編 一九八二「考古学資料図録 第二巻」東北大学文学部
- 鳥居 龍蔵 一九〇五 人類学、考古学の上より研究すべき新領土 考古界五一―六一―六三
- 長町章弘編 二〇〇四「柏木川七遺跡」北海道恵庭市教育委員会
- 新潟 武彦 一九四〇 邦領樺太西海岸北部の遺跡調査概報 人類学雑誌五五―八

- 新岡 武彦 一八一三七  
 一九五一「一九九二」樺太考古学研究史、利札郷土研究七：一―一三八、  
 「再録 樺太考古学研究史」「サハリン南部の考古資料」(新岡武彦・  
 宇田川洋、二九五―三二六、北海道出版企画センター)
- 新岡 武彦 一九七〇 旧邦領樺太先史土器論考、北海道考古学六：一―一四  
 新岡武彦・宇田川洋 一九九〇「サハリン南部の遺跡」北海道出版企画センター  
 新岡武彦・宇田川洋 一九九二「サハリン南部の考古資料」北海道出版企画センター  
 西本豊弘編 二〇〇九「弥生農耕の起源と東アジア」国立歴史民俗博物館  
 西脇対名夫編 二〇〇四「恵山町恵山貝塚」北海道埋蔵文化財センター重要遺跡確認  
 調査報告書第四集、北海道埋蔵文化財センター  
 農商務省農務局編 一九一二「第三次畜産統計 農務彙纂第三十六」農商務省  
 野村 崇 一九九六 近年発掘されたサハリン州先史時代遺跡のC年代について、  
 北海道開拓記念館研究紀要二四：六七―七四
- 福田正宏・Shevkonud, I.・高橋 健・Kositsyna, S.・Gorshkov, M.・木山克彦  
 二〇〇七 アムール河口域の年代測定結果とその検討、「北海道におけ  
 る古代から近世の遺跡の暦年代」(白杵 勲、編)、三九―四三、札幌学  
 院大学
- 福田 正宏 二〇〇九 間宮海峡北部周辺地帯における紀元前一千年紀の土器編年  
 歴史遺産研究五：三七―五四  
 福田 正宏 二〇一〇 オホーツク文化成立以前の先史文化、「北東アジアの歴史と  
 文化」(菊池俊彦、編)、二七―二八六、北海道大学出版会  
 福田 正宏 二〇一四 サハリン・アムール流域、北海道考古学五〇：一三七―  
 一五〇
- 福田正宏・シエフコムド編 二〇〇五「アムール下流域における新石器時代から初  
 期鉄器時代への文化変容についての研究」東京大学大学院人文社会  
 系研究科附属北海文化研究常呂実習施設  
 松田 功編 二〇一〇「ウトロ遺跡」斜里町文化財調査報告XXXII、北海道斜里町  
 教育委員会
- 皆川洋一編 二〇〇二「奥尻町青苗砂丘遺跡」北海道埋蔵文化財センター重要遺跡確  
 認調査報告書第二集、北海道埋蔵文化財センター  
 森田知忠編 二〇〇三「北広里三遺跡IV」北海道深川市教育委員会  
 柳田 國男 一九六八「九八九」樺太紀行、「再録 樺太紀行」柳田國男全集二(「柳  
 田國男」、五七八―六〇二、ちくま文庫)  
 山浦 清 二〇〇三 一九九三年サハリンにおけるウスチアインスコエ遺跡の調  
 査「オホーツク文化形成期の諸問題」北海道大学総合博物館研究報  
 告一：三三―四〇
- 山谷文人編 二〇一一「利尻富士町役場遺跡発掘調査報告書II」北海道利尻富士町教  
 育委員会  
 吉田 邦夫 二〇〇四 火炎土器に付着した炭化物の放射性炭素年代、「火炎土器の  
 研究」(新潟県立歴史博物館、編)、一七―三六、同成社  
 吉田邦夫・西田泰民 二〇〇九 考古学が探る火炎土器「火炎土器の国 新潟」(新  
 潟県立歴史博物館、編)、八七―九九、新潟日報事業社  
 米村 衛・梅田広大編 二〇〇九「史跡最寄貝塚」北海道網走市教育委員会、  
 ワシレフスキー, A. A. (木村英明訳)一九九二「サハリン島の新石器文化」(概説)、  
 北海道考古学二八：一一―一三六  
 ワシレフスキー, A. A. 二〇〇二 鈴谷と続縄文「Okhotsk culture formation,  
 metamorphosis and ending」(Edited by Amano, T., Vasilevski, A.),  
 八五―一〇〇、北海道大学総合博物館  
 ワシレフスキー, A. A. (井上絃一・福田知子訳) 二〇〇三「サハリンにおける前オ  
 ホーツク文化の諸問題」オホーツク文化形成期の諸問題「北海道大  
 学総合博物館研究報告」一：一一―一八  
 ワシレフスキー, A. A.・グリシェンコ, V. A.・フェドルチュク, V. D.・モジャエ  
 フ, A. V. (木山克彦訳)  
 二〇〇九 二〇〇三―二〇〇七年におけるサハリン国立大学による考古  
 学調査、北海道考古学四五：四五―五八
- Bronk Ramsey, C. Scott, E.M. van der Plicht, J.  
 2013. Calibration for archaeological and environmental terrestrial samples in  
 the time range 26-50 ka cal BP. Radiocarbon 55 : 2021-2027.  
 Dyakonov, V.M.  
 2012. Ceramic of the Uyakhan-Segeleenyakh Culture, Early Bronze Age,  
 Yakutia. Archaeology Ethnology & Anthropology of Eurasia 40-4 : 106-115.  
 Gorbunov, S. Amano, T.  
 2002. Archaeological Materials from Kalinin-1, 2 and Ivanovka in  
 Southwestern coast of Sakhalin. [Okhotsk culture formation, metamorphosis  
 and ending] (Edited by Amano, T., Vasilevski, A.), 160-169, 北海道大学総合博  
 物館  
 Kuzmin, Y.V. Vasilevski, A.A. Gorbunov, S.V. Burr, G.S. Jull, A.J.T. Orlov, A.A.  
 Shubina, O.A.  
 2004. Chronology of prehistoric cultural complexes of Sakhalin Island (Russian  
 Far East). Radiocarbon 46 : 353-362.

- Васильевский А. А.  
2008. Каменный век острова Сахалин. Южно-Сахалинск. Сахалинское кн. изд-во.  
Васильевский А. А., Горбунов С. В., Кузьмин Я. В., Шубина О. А.  
2004. Радиоуглеродная и календарная хронология археологических культур Сахалина и Курильских островов. Ученые записки Сахалинского государственного университета. 4:45–53.  
Васильевский А. А., Грищенко В. А.  
2012. Сахалин и Курильские острова в эпоху палеометалла. Ученые записки Сахалинского государственного университета. 9:29–41.  
Васильевский Р. С., Голубев В. А.  
1976. Древние поселения на Сахалине. Новосибирск: Наука.  
Голубев В. А.  
1973. Археологические памятники Сахалинской области. Южно-Сахалинск: Дальневост. кн. изд-во.  
Козырева Р. В.  
1967. Древний Сахалин. Л.: Наука.  
Федорчук В. Д.  
1998. Керамика поселений с раковинными кучами северного побережья залива Терпения. Вестник Сахалинского музея. 5:143–162. Южно-Сахалинск: Сахалинская областная краеведческий музей.  
Шенкомуд И. Я.  
2002. Поселение Большая Бухта-1 и некоторые проблемы культуры Нижнего Амура и Сахалина. Записки Гродковского музея. 3:37–52. Хабаровск: Хабаровский краев. краеведческий музей им. Н. И. Гродекова.  
Шенкомуд И. Я.  
2003. Палеометалл северо-востока Нижнего Приамурья (поселение Гольд Мис-5). Амуро-Охотоморский регион в эпоху палеометалла и средневековья. Т.1, Под ред. В. А. Дерюгина. 7-22. Хабаровск: Хабаровский краев. краеведческий музей им. Н. И. Гродекова.  
Шубин В. О.  
1979. Раскопки многослойного поселения Озерск. Археология Амуро-Сахалинского Региона. Отв. ред. Р. С. Васильевский. 5:29. Владивосток: ДВНЦ АН СССР.  
Шубин В. О., Шубина О. А.  
1977. Станки первобытного человека на южном Сахалине. Исследования по археологии Сахалинской области. Отв. ред. Р. С. Васильевский. 62-102. Владивосток: ДВНЦ АН СССР.
- Шубина О. А., Жупиховская И. С.  
1986. К вопросу о выделении локальных культур в неолите Северного Сахалина (по материалам керамических традиций). XXVII съезд КПСС и задачи музейного строительства в Сахалинской области (Препринт). Отв. ред. В. О. Шубин: 16-18. Южно-Сахалинск: ИМП Г ДВНЦ АН СССР, Сахалинский областной краеведческий музей.  
Эрпиков В. И.  
1990. Усть-мильская культура эпохи бронзы Якутии. М.: Наука.
- 図の出版  
図1  
大日本帝国陸地測量部作成五万分の一地図「留多加」「喜美内」「大泊」(昭和三年測量)より作成  
図二  
一・二: 内山編一九九五・三・一〇: 伊東一九四二・四: Васильевский・Голубев, 1976, 五: 泉・曾野編一九六七・六一八: 山浦二〇〇三・九: 新岡一九四〇・一一―一一三: Шубин 1979, 14: 熊木二〇〇四・一五・一六: 大場一九六七
- 熊木 俊朗 (東京大学大学院人文社会科学系研究科、  
国立歴史民俗博物館共同研究者)  
福田 正宏 (九州大学大学院人文科学系研究科、  
国立歴史民俗博物館共同研究者)  
國木田 大 (東京大学大学院人文社会科学系研究科、  
国立歴史民俗博物館共同研究者)  
(二〇一五年七月一七日受付、二〇一六年一月二九日審査終了)

---

## **Chronological Study of Susuya Type Pottery : In Relation to “Karafuto Kikō” by Kunio Yanagita**

KUMAKI Toshiaki, FUKUDA Masahiro and KUNIKITA Dai

The archaeological site of Solov'evka, which Kunio Yanagita visited on his trip to Sakhalin in 1906, corresponds to the Minami shell mound (also known as the Solov'evka site). This site, along with the Susuya shell mound in the vicinity, is considered one of the most important sites in Sakhalin archaeology. Objects unearthed from these sites are referred to as standard artifacts to distinguish Minami kaizuka type pottery from Susuya type pottery. Among them, the latter is examined in this paper to reassess its age. Dated between the Epi-jōmon culture and the Okhotsk culture and distributed in areas/cultural groups between Hokkaidō and the Lower Amur River basin, Susuya type pottery has been considered to provide an important clue in revealing the relationships between them. Nevertheless, its chronological and typological categories have not been fixed yet, partly because the upper limit of the age range is unknown. The results of radiocarbon dating and the reassessment of existing dating evidence in this study indicate that Susuya type pottery is dated to between the fourth century B.C. and the sixth century A.D. in Sakhalin and to between the first and sixth century A.D. in Hokkaidō. In the light of these results, this paper suggests that Susuya type pottery was first established in Sakhalin and later made an impact on the pottery of Hokkaidō. In view of the conventional chronology of pottery types, this assumption raises the following issues. First of all, because the pottery of Northern Sakhalin cultures, such as the Kashkalebagshch, Pil'tun, and Nabil' cultures whose existence was suggested by recent studies of Northern Sakhalin, as well as Bol'ishaya Bukhta type pottery which was closely related to cultures in the Lower Amur River basin, are chronologically close to early Susuya type pottery, it is essential to examine the detailed typological relationships between Susuya and these types of northern pottery. Moreover, it is necessary to review the conventional chronology of pottery types because it still suggests that early Susuya type pottery was distributed in Hokkaidō as well. These issues must be clarified as soon as possible to facilitate chronological studies of Susuya and other types of Epi-jōmon culture pottery as well as the pottery of the Paleometal Age in Sakhalin.

Key words: Susuya type pottery, Okhotsk culture, Epi-jōmon culture, Sakhalin, Hokkaidō

---